



TITLE:

北魏平城時代における墓制の變容

AUTHOR(S):

向井, 佑介

CITATION:

向井, 佑介. 北魏平城時代における墓制の變容. 東方學報 2010, 85: 133-177

ISSUE DATE:

2010-03-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/131787>

RIGHT:

北魏平城時代における墓制の變容

向井 佑 介

はじめに

北魏が平城を都とした四世紀末から五世紀末までのおよそ一世紀は、拓跋鮮卑が中國文化を吸収して中國的變容をとげるとともに、隋唐の文化や制度の基盤を形成した時代でもあった。ことに、五世紀後葉に孝文帝が推進した漢化政策が、北魏の文化的變容を大きく進展させたことは疑いない。太和十八年（四九四）に孝文帝が實施した洛陽城への遷都は、その漢化政策を象徴するものであった。北魏洛陽の制度や文化が孝文帝の理想を具現化したものであるとすれば、先行する平城の文化には胡漢の葛藤と融合の過程が反映されているといえよう。小稿は、洛陽遷都後に完成をみた北魏の墓制を念頭におきつつ、平城時代の墓制にあらわれた胡族の傳統とその中國的變容の過程をさぐるものである。

拓跋鮮卑の文化について、はじめて體系的に論じた考古學の論考は、北京大學の宿白があらわした「鮮卑遺迹輯録」である〔宿白一九七七・七八〕。これは、馬長壽（一九六二）の考證をうけて、大興安嶺北部の內蒙古自治區ホロンバイル附近か

ら初期鮮卑の文化が南遷していく過程を追うとともに、北魏の平城（山西省大同市）と洛陽城（河南省洛陽市）周辺における考古學的知見を文献史料とあわせて考察し、拓跋鮮卑の文化について論じたものである。一連の研究は、當時における鮮卑考古學の到達点を示しており、以後の研究は、宿白の提示した枠組みを新たな発見によって埋めていくことで進められてきたといっても過言ではない。

近年では、中國各地で發掘調査が進み、鮮卑にかんする考古資料は飛躍的に増加した。内蒙古自治区では、鮮卑墓についての新たな調査成果がまとめられ〔魏堅主編二〇〇四〕、また鮮卑文化について考古學の立場から論じた專著も公刊された〔孫危二〇〇七〕。平城遺址の所在する大同市附近でも、現在までに多數の北魏墓が発見され、その總數は數百基におよぶ。最近では、大同南郊墓群〔山西大學歷史文化學院ほか二〇〇六〕と雁北師院墓群〔大同市考古研究所二〇〇八〕の正式報告書が刊行され、平城時代の墓制の具體像が明らかになってきた。これらの新出資料を整理し、また近年の研究の妥當性を檢證して、研究の枠組みを再構築することは、今後の研究の進展のために不可欠の作業である。

考古學から墓制を分析するうえで、常につきまとうのが、被葬者の民族比定の問題である。發掘された墓は、文献の記載や墓誌などの文字資料によって具體的に被葬者が特定できない限り、その出自を明確にすることは難しい。現在までの考古學的研究は、鮮卑に特有の棺形態や土器様式をみだし、その系譜をたどることで、鮮卑の遷徙経路やその文化のひろがりについて議論してきた。最新の鮮卑考古學においても、その方法は妥當なものと明言されている〔章正二〇〇九〕。しかし、考古學の手法によって抽出した文化は、決して特定の民族・部族・氏族のひろがりであらわすものではなく、その點に現在の鮮卑考古學の危うさがある。

平城時代の墓制研究も、同様の問題をかかえている。現在までに發掘された墓のほとんどは、具體的な被葬者を特定することができない。北魏平城の民族構成が、漢族を含む雜多なものであったことは、文献の記載からも明らかである。そ

の國家は、もともと拓跋鮮卑を中核とする部族連合體で、遊牧諸部族の構成がそもそも單純ではなかった。さらに、華北に進出するにあたって、多數の人民を平城一帯へと徙したから、北魏平城の民族構成は相當に複雑だったはずである。しかし、そのような多様な民族構成を、考古資料からときほぐすことは不可能である。被葬者の出自を埋葬習俗や土器様式から推測したところで、いたずらに混亂をまねくだけであろう。それよりも重要なことは、北魏の墓には被葬者の出自にかかわらず共通する特徴があり、その多様な出自の人びとが同じ北魏文化のなかにあったことである。拓跋鮮卑を支配層とする北魏國家には、胡漢に通底する文化があった。それがいかに形成され、變容していったのかを説明すれば、支配層たる拓跋鮮卑の文化的變容の過程を究明することができるはずである。

本稿では、次のような手順で分析をおこなう。まず、大同南郊で發見された北魏墓群を對象とし、年代の基準となる土器の編年を検證し、その結果をふまえて、墓の構造や形態がどのように變遷したのかを明らかにする。ついで、五世紀における塋室墓の構造的變遷を説明し、あわせて土洞墓と塋室墓の差異が生じた原因を追究する。そして、五世紀後葉にいたって、墓構造や副葬品のなかに規格や序列が明確化していく過程をさぐり、その變化の背景を考察するとともに、それが洛陽遷都後にどのように繼承されていたのかを明らかにすることにした。

一 北魏墓副葬土器の編年

大同市街の南およそ三キロ、紅旗村より七里村の一帯で、一九八七年に多數の北魏墓が發見され、翌年に調査された。現地は、市街の東を流れる御河（如渾水）と、西方より合流する十里河（武州川）とにはさまれた微高臺地で、「張女墳」と俗稱される。調査の結果、一六七基におよぶ北魏墓が發掘された。小型の墓ばかりで墓誌や題記などは發見されず、具體

的な被葬者はわからないものの、平城遷都前後から洛陽遷都後までの墓群の變遷を知りうる稀少な例である。その調査成果は、二〇〇六年に『大同南郊北魏墓群』として公刊された〔山西大學歷史文化學院ほか二〇〇六〕。

(1) 大同南郊墓群の土器編年

報告は、土器(陶質土器)を第一から第五組に分類し、それに對應する墓の年代を次のように決定した。

第一段階 平城遷都の天興元年(三九八)以前

第二段階 天興元年から太武帝が華北を統一した太延五年(四三九)まで

第三段階 太延五年から太和初年(四七七)まで

第四段階 太和初年から洛陽遷都(四九四)まで

第五段階 洛陽遷都以降

出土した土器には、口縁部が喇叭狀にひろく細頸壺、太い頸部から短い口縁部がひろがる平沿罐、太い頸部に受口狀の口縁がつく盤口罐、頸部が短くたちあがる矮領罐、粗製の土器である夾砂戳刺紋罐などがある。報告は、すべての器種をそれぞれ形態の特徴にもとづいて細分し、他の墓から出土した年代の明瞭な土器と比較して編年をおこなった。まず、時期による器形の變化がわかりやすい細頸壺・平沿罐・盤口罐をもとにその變遷を確認しておく(圖1)。

第一段階とされるのは、二四號墓・七三號墓・二二七號墓の三基である。出土した壺や罐は、素紋あるいは刺突紋など裝飾の單純なものが多く、格子狀の暗紋をかざるものもある。壺はなで肩で、胴部なかほどで最大徑をはかる。器壁は厚く、色調は淺灰色の多い。報告書が年代の指標とする侈口罐は、內蒙古自治區察右後旗の三道灣墓地〔烏蘭察布博物館一九九四〕、巴林左旗南楊營子墓〔中國科學院考古研究所內蒙古工作隊一九六四〕、遼寧省北票房身村晉墓〔陳大爲一九六〇〕などに

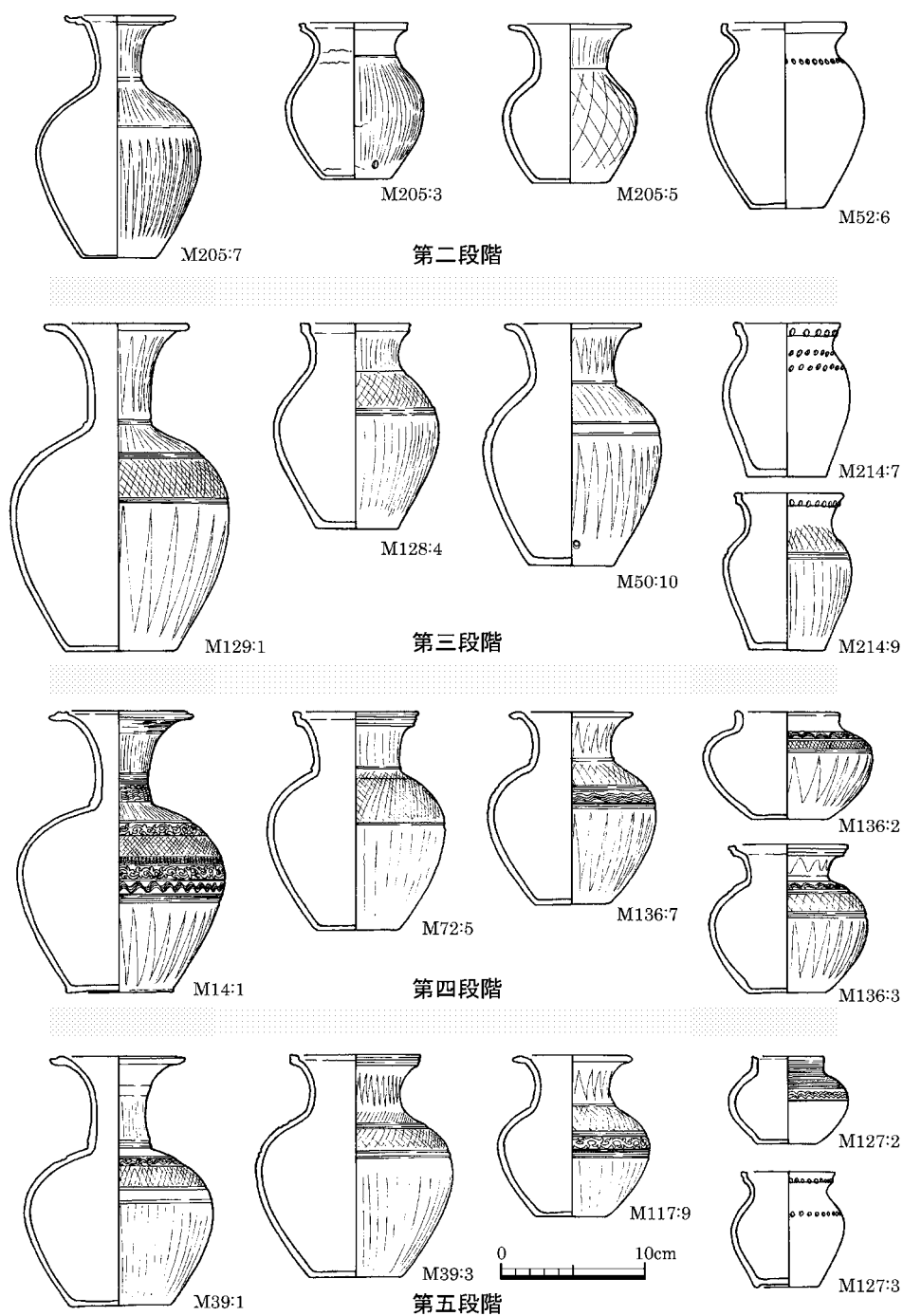


圖1 大同南郊墓群の土器編年

類例があり、矮領罐も三道灣墓地の土器に共通の要素をもつという。ただ、七三號墓や二二七號墓から出土した壺をみると、粗雑なつくりとはいえ、明らかに第二段階以降の土器と裝飾や形態の上で共通する。粗製の罐を根據に、これらを平城遷都以前に位置づけてよいものかどうか検討の餘地があるう。

第二段階は、一號墓・五二號墓・五四號墓・一八〇號墓・二〇五號墓・二四〇號墓など三三基がある。出土した土器のうち、平沿罐と細頸壺は呼和浩特の美岱村北魏墓〔李逸友一九五七〕出土例と類似し、これが年代の指標とされている。細頸壺は頸部がやや太く短い。なで肩で、丸味を帯びた長卵形の胴部を呈する。罐・壺ともに胴部のなかほど、あるいはそれよりやや上で最大徑をはかる。器面の裝飾は全體に縦位または格子狀の暗紋をほどこすものが多い。胴部上半に波狀紋をかざるものや口緣下端に刺突紋をかざるものもある。器壁はややうすくなり、胎土は淺灰色のものが大半であるが、スリップをかけ表面を黒化したものもあらわれる。

第三段階は、二八號墓・五〇號墓・一〇七號墓・一二七號墓・一二八號墓・二一四號墓・二二九號墓など六〇基である。この時期には、細頸壺の胴部は依然として丸味を帯びた卵形であるが、最大徑がやや上方に移り、胴部から底部にかけて直線的にすぼまる。平緣罐や盤口罐も同様に、前段階にくらべ肩のはった器形となる。器面の裝飾は、沈線・刻み目突帶・波狀紋帶などで胴部紋樣帶を上下二段に分割し、暗紋で裝飾する。暗紋による裝飾は、胴部上半が格子紋、頸部と胴部下半は縦位またはジグザグの暗紋をかざるものが多い。

第四段階は、一四號墓・七二號墓・一三四號墓・一三六號墓など四一基である。細頸壺や盤口罐は、肩が大きくはりだし、胴部は高さを減じて重心が低くなる一方、頸部は細長くなる。紋樣帶は、頸部より下を三段に分割するものが多い。回轉印紋でパルメット唐草紋や方格紋をかざるものが流行し、櫛狀工具による波狀紋や平行沈線紋も多用される。盤口罐の口緣部には、凹線紋を施すものが多くなる。器壁はうすく、硬質になり、胎土は深みをおびた青灰色を呈し、スリップ

をかけるものはない。太和元年（四七七）の宋紹祖墓（山西省考古研究所ほか二〇〇二）や太和八年（四八四）の司馬金龍墓（山西省大同市博物館ほか一九七二）出土の盤口罐が年代の指標となる。

第五段階には、三九號墓・一一〇號墓・一一七號墓・一二七號墓など九基がある。盤口罐や細頸壺は、前段階にひきつづき、重心が低く、肩が大きくはりだした器形である。紋様は前段階にくらべてやや簡略化し、胴部の文様帯は沈線や波状紋帯、回轉印紋によるパルメット唐草紋帯などで上下二段にわけられるものが増加する。器面を丁寧に磨き、暗文をかざるものが多い。盤口罐の口縁部には凹線紋を施したものが目立つ。永平元年（五〇八）の元淑墓（大同市博物館一九八九）の土器が年代の指標とされるが、器形や裝飾において元淑墓の土器とはなお隔たりがある。

このように、各段階における精製の壺や罐の變遷を通覧すると、長卵形の胴部なかほどで最大徑をはかるものから、肩がはって胴部上半に最大徑があるものへと變化することがわかる。ふるいものは軟質で器壁の厚いものが多いが、次第に硬質で器壁のうすいものへと變化する。裝飾は、初期の單純なものから次第に複雑化し、第五段階には再びやや簡略化する。各段階のなかで第一段階と第五段階の設定についてはなお検討を要するものの、平城の時代を第二から第四段階まで三段階にわけることには大きな問題はないであろう。つづいて、各段階の實年代について、報告書刊行後に新たに公表された資料や他地域の資料と比較しながら檢證する。

（2）實年代の檢證

美岱村北魏墓と夏の土器 呼和浩特の美岱村では、一九五五年に博室墓から、鍔・鏃などの青銅器、指輪などの金製品、長頸壺・平沿罐などの土器が発見された（李逸友一九五六）。とりわけ注目されたのが一組の虎符で、その背には「皇帝與河内太守銅虎符第三」、胸部に「河内太守」、腹部に「銅虎符左」「銅虎符右」の銘文が刻まれていた。當初それらは漢代のも

のとして報告されたが、靜宜（一九五六）は、その文字や形態が、一九二五年に山西省大同縣で発見された八組の虎符と共通することから北魏のものと訂正した。それらの虎符は、『増訂歷代符牌圖錄』（羅振玉一九三五）などに收録されている。馬衡（一九五六）によれば、大同附近で発見された八組の虎符は、左右が完備することから頒布の前、すなわち平城の都で保管されていた状態にあり、その製作年代は北魏建國直前にさかのぼる可能性があるという。このような虎符の年代観にもとづき、美岱村北魏墓は北魏初期の基準資料とされてきた。しかし、銘文にみえる「皇帝」の文字が皇始元年（三九六）の拓跋珪による稱帝以後であることをあらわすとしても、國號が記されないことを根據に製作年代を天興元年（三九八）の北魏建國以前とする見解には賛同できない。一般に國號と皇帝とが銘文に併記されることはなく、虎符を賜與する主體は國または皇帝のいずれかである。漢代の虎符は國號を記すものがほとんどであるが、十六國以後には皇帝（天王）が頒賜するものが多くなる。美岱村北魏墓の虎符の年代は、四世紀末以降としかいえず、その具體的な年代については、虎符以外の資料から検討する必要があるだろう。

代國および北魏初期には、美岱村北魏墓と比較しうる年代の明確な墓は発見されていない。参考になるのが、オルドスの南端、夏の赫連勃勃が都した統萬城附近に分布する墓の資料である。統萬城の東一六キロ、内蒙古自治区烏審旗の郭梁村東北では、一九九二年に五基の土洞墓が發掘され、その一號墓は墓誌によって「大夏二年」に葬られた田嬰の墓であると判明した（王大方一九九三。縦五三・〇センチ、横五四・〇センチの方形の墓誌に、次のように刻まれていた。

唯大夏二年歲庚申正／月丙戌朔廿八日癸丑／故建威將軍散騎侍郎／涼州都督護光烈將軍／北地尹將作大匠涼州／刺史
武威田嬰之銘

墓誌に記された「大夏二年」は、夏の眞興二年（四二〇）をさす。夏の存續期間のなかで、干支が庚申にあたるのは眞興二年のみであり、その正月は確かに丙戌朔である。赫連勃勃は四一八年の末に長安を獲得して皇帝を稱し、翌四一九年には

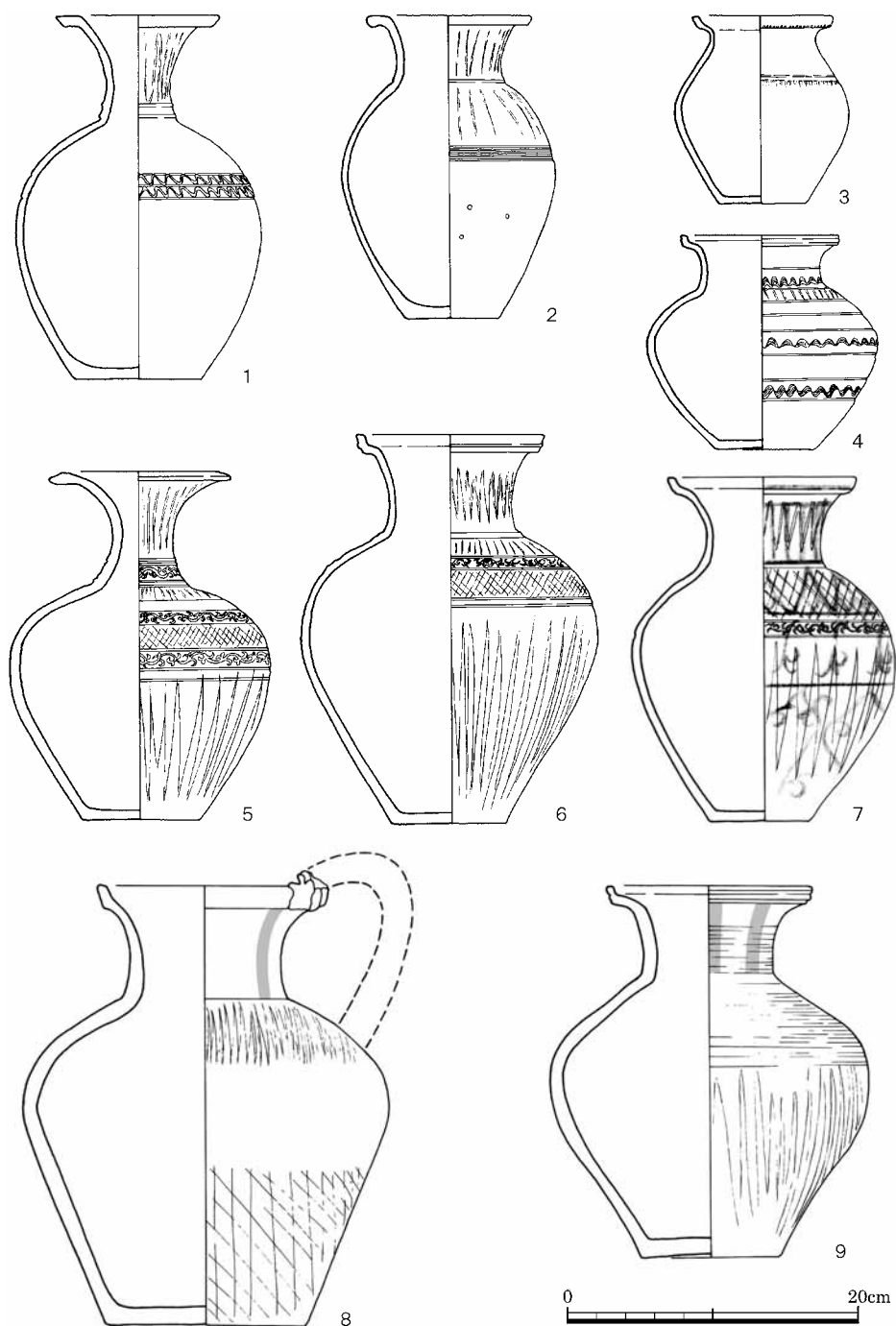


圖2 大同附近の土器

1～3 沙嶺壁畫墓 4 宋紹祖墓 5・6 雁北師院 52 號墓 7 雁北師院 2 號墓 8・9 元淑墓

統萬城に歸還して宮殿を完成させ、四方の城門をそれぞれ朝東門（南）、招魏門（東）、服涼門（西）、平朔門（北）と名づけた。このように國家體制を整備し、中國全土を統一しようという氣概のなかで、赫連勃勃が制定した年號が「眞興」であった。夏國におけるこの年の重要性については、三崎良章（二〇〇二）が詳しく論じている。

墓誌を出土した一號墓は、南から掘りこんだ墓道の奥に方形の墓室を設け、壺・甗などの土器類と鏹斗・鉢などの青銅器を副葬していた。出土した土器は、いま内蒙古自治区文物考古研究所に保管されている。なかでも長頸壺は、胴部なほどで最大徑をはかり、その器形は美岱村北魏墓の壺と酷似している。隣國の資料ではあるが、ひとまずこれを根據に美岱村北魏墓を五世紀初め頃に位置づけて大きな誤りはないであろう。そして、それを指標として設定された大同南郊墓群の第二段階の年代も、おおよそ妥當なものといえよう。

郭梁墓群と類似した土器は、ほかにも統萬城周邊の墓地から出土している。墓地は統萬城から無定河を西南にさかのぼった烏審旗の巴圖灣ダム附近にあり、一九七三年に發見された（陸思賢一九八二）。報告は、その墓を二時期に大別し、土洞墓である一號墓と二號墓は美岱村北魏墓よりやや新しく、また磚室墓である一一～一五號墓は土器の特徴から五世紀後葉のものと考えた。一號墓と二號墓から出土した壺は、先の田嬰墓や美岱村北魏墓の壺とくらべて胴部最大徑の位置がやや上にあり、これらよりいくぶん後出するという報告者の指摘は正しい。他方で、二號墓から出土した燈の形態は、田嬰墓のものと近似し、これらが夏の土器の系譜をひくものであることを示唆する。報告者は、一號墓と二號墓には北魏墓制の影響がみとめられるものの、その被葬者は鮮卑の墓ではない可能性があることを指摘している。これらの墓の造營年代は、田嬰墓との比較から四二〇年以降と考えられるが、北魏太武帝が統萬城を陷落させた始光四年（四二七）以前か以後かは判然としない。墓の造營時にその地が夏と北魏のいずれに屬していたかは確言できないものの、それらが夏の傳統を保有する人びとによって造營されたものであることは確かであろう。

沙嶺壁畫墓出土の土器 第二段階の實年代を確定するもうひとつの資料が、二〇〇五年に御河東岸の沙嶺村東北から發見

された壁畫墓（七號墓）の土器である〔大同市考古研究所二〇〇六a〕。墓室内から出土した漆棺に記された墨書題記の考察により、墓主は太武帝の太延元年（四三五）に沒したと考えられている。墓はすでに盜掘をうけていたが、銀・銅・鐵製品、漆耳杯、施釉陶壺を含む壺・平沿罐・盤口罐などの土器類が出土した。壺（圖2-1）は、胴部が卵形にまるくふくらみ、そのなかほどで最大徑をはかる。胴部なかほどよりやや上に二段の波狀紋帶をつくり、その上方に斜格子、下方に縦位の暗紋をかざる。やや短い頸部は、付け根に二條の突線をめぐらせ、外面に縦位の暗紋を施す。施釉陶器の壺も類似的器形だが、胴部なかほどよりやや上に最大徑があり、裝飾は頸部の付け根に二條の突線をめぐらすのみである。平沿罐（圖2-2）は、卵形にふくらんだ胴部のなかほどよりやや上で最大徑をはかり、肩部に櫛狀工具で數條の平行沈線をかざる。頸部の付け根には一條の沈線をめぐらす。頸部および胴部には縦位の暗紋をかざっている。盤口罐（圖2-3）は、ややつくりが粗く、表面に炭素を吸着させて黒色にいぶしたものである。胴部はなかほどよりやや上で最大徑をはかり、太い頸部から受口狀の口縁がたちあがる。外面の全體を粗いミガキ調整で仕上げている。

これらの土器には、大同南郊墓群の第二段階から第三段階と共通する要素があり、その過渡期に位置づけることができよう。漆棺の題記から導きだされた太延元年（四三五）は、ちょうど第二段階の終わり頃にあたり、大同南郊墓群の編年ともうまく符合している。この時期、壺や罐の最大徑は次第にやや上方へと移り、なで肩の器形から肩がまるくはりだしたもののへと變化し、また裝飾も次第に複雑になる。ただ、それらは第二段階と第三段階の間で明瞭に變化するのではなく、いずれの段階にも新舊の要素が混在し、その差異はあくまで相對的なものである。したがって、沙嶺壁畫墓の土器をもって第二段階の終末を限る絶對的な指標とはなしえないものの、ひとまず大同南郊墓群の第二・第三段階の實年代に大きな誤りがないことが確認できよう。

雁北師院北魏墓群出土の土器 大同南郊墓群の第四段階の土器は、前段階にくらべて、器形や裝飾の面で大きく變化する。

その年代については、太和元年（四七七）の題記をもつ宋紹祖墓と、太和八年（四八四）の墓誌を出土した司馬金龍墓の土器が参考になる。しかし、宋紹祖墓から出土した盤口罐（圖2-4）は小型の粗製品で、當時の典型的な器形や裝飾をあらわしているとはいいがたい。それに對し、司馬金龍墓の盤口罐は、同時期の墓に多くみる精製土器であるが、宋紹祖墓と同じく他の器種が出土しておらず、土器様式の全體をうかがうことはできない。當該期の土器の組みあわせを知るうえで参考になるのが、宋紹祖墓を含む雁北師院墓群の土器である〔大同市考古研究所編二〇〇八〕。

雁北師院墓群は、御河をはさんで大同市街の眞東に位置する。墓群は雁北師範學院（現山西大同大學）の敷地内に所在し、二〇〇〇年の建設工事にもなう分布調査で、北魏墓を含む百餘基の墓の存在が確認された。調査された北魏墓には、五基の埧室墓と六基の土洞墓がある。次章で検討するように、土器や俑などの副葬品の様式において、それぞれの墓の年代には大きな差異がないことから、おそらく五世紀後葉の限られた時期に形成された墓地であろう。そのなかで、墓門の構造や俑の様式から、二號墓と五二號墓は五號墓（宋紹祖墓）とほぼ同時期またはややおくれて造營されたと考えられる。兩墓に副葬された盤口罐の器形が司馬金龍墓のそれと近似することも、これらが太和前半の造營であることを裏づける。

二號墓から出土した盤口罐（圖2-7）には二個體がある。いずれも胴部上半に回轉印紋によるパルメット唐草紋帯をめぐらせ、頸部と胴部下半にはジグザグの暗紋を、胴部上半には格子狀に暗紋をかざる。壺は、頸部の付け根に一重の鋸齒紋帯、胴部上半となかほどにそれぞれ二段の鋸齒紋帯を回轉施紋する。盤口罐と壺はともに彩色で蓮華紋、パルメット唐草紋、鋸齒紋などを描く。これらの器形は、肩がはりだして胴部の上半で最大徑をはかり、胴部下半はまっすぐ底部にむかつて徑を減じていくものである。一方、五二號墓から出土した壺と盤口罐（圖2-5・6）は、器形のうえで二號墓と共通しながらも、頸部や胴部上半に施される裝飾はさらに複雑なものとなっている。これらの特徴は、大同南郊墓群の第四段階と

共通し、第四段階を太和年間の前半に位置づける報告書の見解は穩當なものといえよう。

五世紀における土器の變遷 以上、大同南郊墓群の土器編年について再検討し、その年代がおおよそ妥當であることを確認した。個々の資料の所屬時期や、各段階の開始年代と終末年代は、今後の資料増加によって前後する可能性があるものの、報告書の提示する編年の基準には矛盾がない。

代國および北魏初期の土器には、三燕や夏の土器と類似する要素が少なからずあり、その文化は周邊諸族と共通する文化基盤のうえに形成されていた。北魏は周邊諸族の經驗をふまえて、新たな文化を創出したのである。五世紀における土器の變遷を通覽すると、精製の壺や罐は、長卵形の胴部なかほどで最大徑をはかるものから、肩がはって胴部上半に最大徑があるものへと變化する。初期には器壁が厚くやや軟質の土器が多數を占めたが、時期の下降とともに器壁がうすく硬質のものが増加する。他方で、ホロンバイルの扎賚諾爾墓群出土土器の系譜をひき、鮮卑墓の指標ともされてきた粗製の罐は、時代が下降するほど減少する。これら一連の變化は、とりわけ第三段階と第四段階の間で大きく進展する。

北魏の土器は、底部に回轉臺の壓痕や回轉糸切り痕を残すものが初期の段階から存在し、成形・施紋時に回轉臺を用いたことが知られる。器面をミガキ調整しない施釉陶器では、回轉を利用した成形・施紋のようすが明瞭に觀察でき、とりわけ第四段階以降に轆轤技術が高度に發達したことがうかがえる。このような變化は、素朴な粗製土器しかもたなかった拓跋鮮卑が、先行する胡族國家や漢人社會との接觸によって、次第に高度な手工業技術を自らの社會のなかにとりいれていく過程をあらわしている。それは、征服地からの徙民といった強制的な政策の結果ともいえるであろう。

第四段階の壺や罐は、最大徑が胴部の上方に移動して肩が大きくなった器形となり、また胴部の高さを胴部徑が上回るものが増加する。うすく仕上げた器壁を丁寧研磨し、回轉印紋によって流麗なパールメット唐草紋をかざり、精製土器の技術は頂點に達する。このような精製土器は、もっぱら墓への副葬を目的として製作されたと考えられ、雲岡石窟のよう

な寺院址からは出土しない〔岡村編二〇〇六〕。平城の時期には施釉陶器もつくられていたとはいえ、器形は陶質の土器とかわらず、それが高位の墓に集中するという現象もみられない。副葬の主體はあくまで陶質の土器であった。しかし、第五段階になると、高位の墓には土器にかわって青磁が副葬されることが多くなり、土器の装飾は再び簡略化していく。永平元年（五〇八）の元淑墓から出土した龍形の把手をもつ盤口壺（圖2-8）は、明らかに青磁の器形を模倣したもので、この時期における青磁への志向をみてとることができよう〔大同市博物館一九八九〕。

二 墓の構造とその變化

前章では、大同南郊墓群の土器編年を検證し、その年代觀が妥當であることを確認した。まず、この編年にもとづき、五世紀における小型墓の構造的變遷を明らかにする。ついで、北魏の墓制のなかに、埧室墓が出現し、定着していく過程を究明する。さらに、當該期の墓地がいかに形成されていたのか、また墓地内に複数の墓室構造が併存することが、いかなる意味をもっていたのかを考察する。

（1）小型墓の構造と變遷

大同南郊墓群の性格 大同南郊墓群の一六七基の墓は、密集しながらも切り合いがほとんどなく、古い時期の墓をさけて新しい墓が造營されている。墓群全體の分布をみると、東西向きの墓が東側と西側に密集し、その中央を南北に貫くように南向きの墓がならんで造營されている（圖3）。造營された墓には、いくつかの單位がみいだせる。墓群西側には、墓道を東向きに開口する一〇二・一〇三・一〇六・一〇七・一一六號墓が南から北に竝列し、すべて第三段階に造營されたも

北魏平城時代における墓制の變容

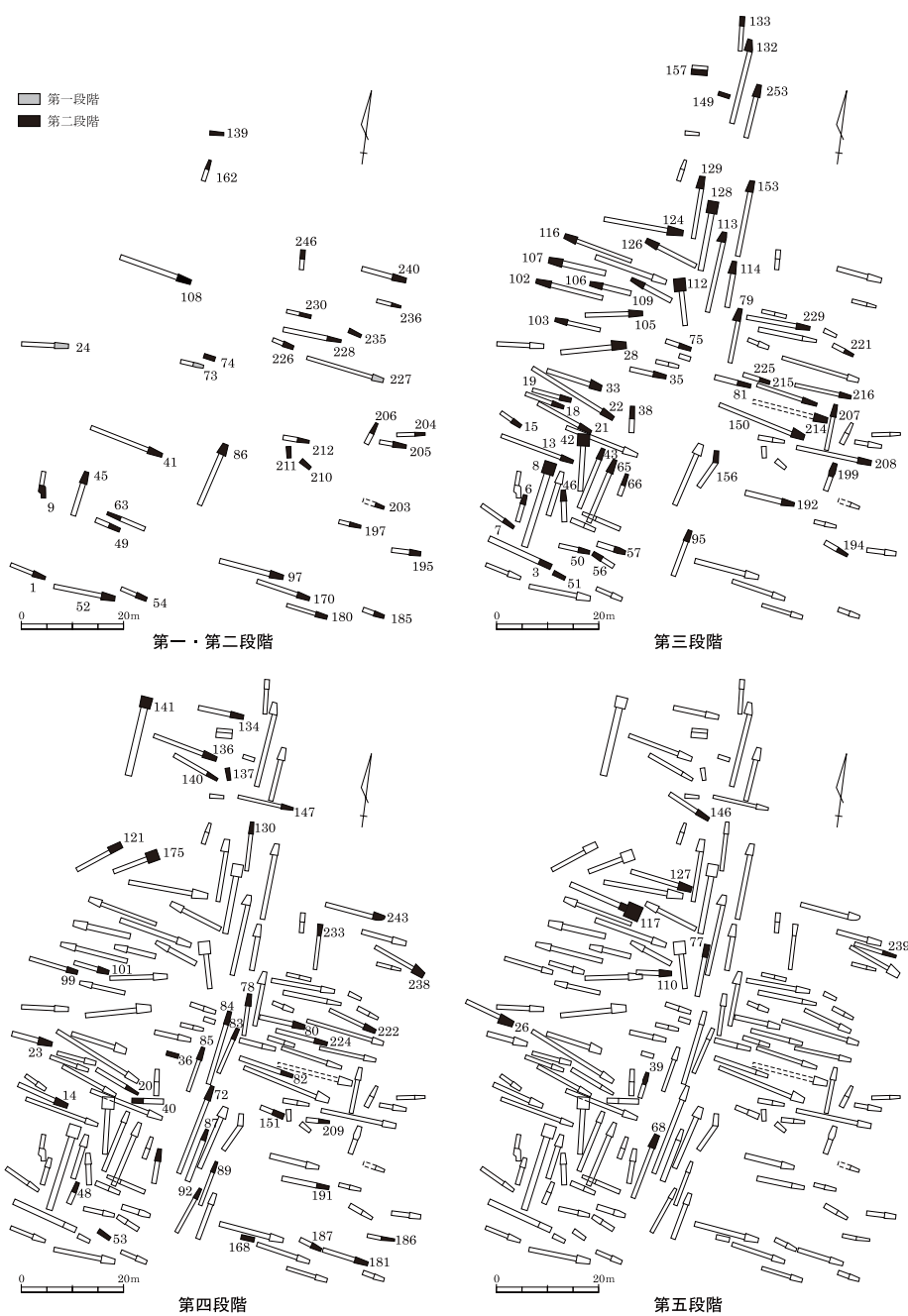


圖3 大同南郊墓群の變遷

のである。墓群中央の南向きの墓では、北側に第三段階の七九・一二三・一二四・一二八・一二九・一五三號墓がならび、その南に第四段階の七二・八三・八四・八五・八九・九二號墓などが分布する。いずれも、墓道の向きを同じくする複数の墓からなり、造營時期も近接している。報告が指摘するように、これらの單位が、家族墓地としての性質を帯びていた可能性はある。しかし、向きを異にする墓どうしが密集してつくられている状況は、それぞれの單位が一定の面積を占有していたのではなく、この墓群全體が共同墓地としての性格をもっていたことを示している。つまり、大同南郊墓群は複数の家族が葬られた共同墓地で、各家族が占有する空間は明確に區別されていなかったのだろう。

大同南郊墓群から出土した人骨については、形質學的な分析がなされている。その頭蓋骨の形質は、全體として現在のイヌイトおよび初期の烏孫と近似し、ツングース、匈奴、モンゴルのほか、扎賚諾爾墓群の人骨ともちかい関係にあるという〔山西大學歷史文化學院ほか二〇〇六、王銀田二〇〇八〕。そして、これら北魏墓の古人骨が、いわゆる漢族の形質とは異なり、北アジアから北東アジアにひろく分布する蒙古人種、おそらくは北方遊牧民の系統に屬する可能性を指摘した。その分析結果にしたがえば、具體的な民族や部族を特定することはできないとしても、大同南郊墓群が胡族の墓地である可能性はたかい。したがって、この墓群は平城周邊に居住した胡族の共同墓地と考えてよいだろう。

墓室構造の變化 報告は、一六七基の墓を構造の差異により五種に分類した。地表から墓壙を掘りこんで棺を埋めた豎穴土壙墓（圖4-1）、豎穴式の墓道の奥に横穴を掘りこんだ豎井墓道土洞墓と豎井墓道横穴土洞墓、スロープ状墓道の奥に横穴を掘りこんだ長斜坡底墓道土洞墓（圖4-2、4）、スロープ状墓道の奥に埽で墓室を築いた長斜坡底墓道埽室墓（圖4-6、8）がある。時期不明の墓をのぞいた各段階における墓構造の數量は、次のとおりである。

第一段階 豎井墓道土洞墓一基、長斜坡底墓道土洞墓一基

第二段階 豎穴土壙墓五基、豎井墓道土洞墓一七基、長斜坡底墓道土洞墓一一基

第三段階 豎穴土壙墓二基、豎井墓道土洞墓一八基、豎井墓道橫穴土洞墓一基、長斜坡底墓道土洞墓三九基

第四段階 豎穴土壙墓四基、豎井墓道土洞墓六基、長斜坡底墓道土洞墓三一基

第五段階 豎井墓道土洞墓二基、長斜坡底墓道土洞墓六基、長斜坡底墓道塹室墓一基

長斜坡底墓道塹室墓は第五段階に一基あるのみで相對的に新しい形式だが、豎穴土壙墓は第二段階から第四段階まで、豎井墓道土洞墓と長斜坡底墓道土洞墓は全時期をつうじて存在し、時間的な變化は不明瞭である。

これに墓室の形態を加味して考察すると、第一段階と第二段階の豎井墓道土洞墓や長斜坡底墓道土洞墓は、多くが小型の梯形墓室である。第三段階にも梯形墓室の豎井墓道土洞墓と長斜坡底墓道土洞墓は存続するが、偏室・長方形・方形墓室など墓室の形態は多様化する。梯形墓室や長方形墓室が、棺をおさめるための最低限の空間しか備えていなかったのに對し、第三段階に新たに出現した方形墓室は、後述するように、死後の靈魂の生活空間として準備されたものであった。第四段階以降の長斜坡底墓道土洞墓や塹室墓においてもこの傾向は繼續し、方形の墓室が次第に増加する。

內蒙古地區鮮卑墓との比較 前章で確認した大同南郊墓群の編年を、內蒙古地區的鮮卑墓編年〔魏堅主編二〇〇四、孫危二〇〇七〕と比較すると、その年代觀に大きな相違があることに氣づく。その最大の原因は、長城以北の編年が、おもに墓の構造にもとづいていることによる。內蒙古地區的編年は、鮮卑墓を次のように分期している。

第一期 前一世紀末～一世紀末（ホロンバイル市拉布達林・扎賚諾爾・七卡墓群など）

第二期 二世紀初～二世紀後半（ホロンバイル市團結墓群、巴林左旗南楊家營子墓群、商都縣東大井墓群など）

第三期 二世紀末～三世紀末（察右後旗三道灣墓群、托克托縣皮條溝墓群など）

第四期 四世紀初～四世紀末（察右中旗七郎山墓群、興和縣叭溝墓群、大同南郊墓群など）

第五期 五世紀初～六世紀前半（呼和浩特市美岱村北魏墓・大學路北魏墓など）

これらのうち、第一期から第三期までの墓地は基本的に木棺直葬の竪穴土壙墓である。第四期は、土洞墓が出現し、これに竪穴土壙墓がまじる。第五期は、埴室墓と土洞墓が多く、竪穴墓は減少するという。このうち、竪穴土壙墓が相對的にふるく、土洞墓がそれにつづくことは疑いがない。埴室墓を第五期とすることにも異存はない。

ところが、その編年をみると、大同南郊墓群のように土洞墓が多數を占める墓地は、すべて第四期に位置づけられている。すでに確認したように、大同南郊墓群の編年では、四世紀代にさかのぼる墓はごくわずかで、ほとんどは五世紀代の墓である。同じく第四期に編年されている七郎山墓群の六號墓や七號墓には、肩がはって胴部上半に數段の紋様帶をめぐらせた長頸壺が副葬されており、これらは大同南郊墓群でいう第三段階から第四段階、すなわち五世紀中葉から後葉のものである。七郎山墓群の一部に四世紀代の墓が含まれる可能性は否定できないが、大半は五世紀代の墓であろう。

既述のように、小型墓を中心に構成される大同南郊墓群は、竪穴土壙墓と土洞墓がほとんどで、五世紀後葉にいたっても埴室墓はほとんど存在しない。魏堅や孫危らがいうように、確かに内蒙古地區では五世紀初めに埴室墓が出現するが、依然として竪穴土壙墓や土洞墓ばかりで構成される墓地もあったのである。つまり、墓の構造には相對的な時期差があるものの、五世紀をつうじて複數の形式の墓が造営されていた。以下では、埴室墓の出現と變遷について検討し、さらに同じ墓群のなかで複數の構造がどのように使われていたのかをさぐることにする。

(2) 埴室墓の出現

美岱村北魏墓 一九五五年に美岱村で發見された埴室墓は、出土遺物の簡単な報告があるのみで、墓の大きさや構造については記載がない〔李逸友一九五六・一九五七〕。しかし、一九六一年にこの墓の東二百メートルの地點で、再び北魏の埴室墓が發見され、鍍などの青銅器、指輪などの金製品、土器類が出土した〔内蒙古文物工作隊一九六二〕。副葬された壺や罐などの

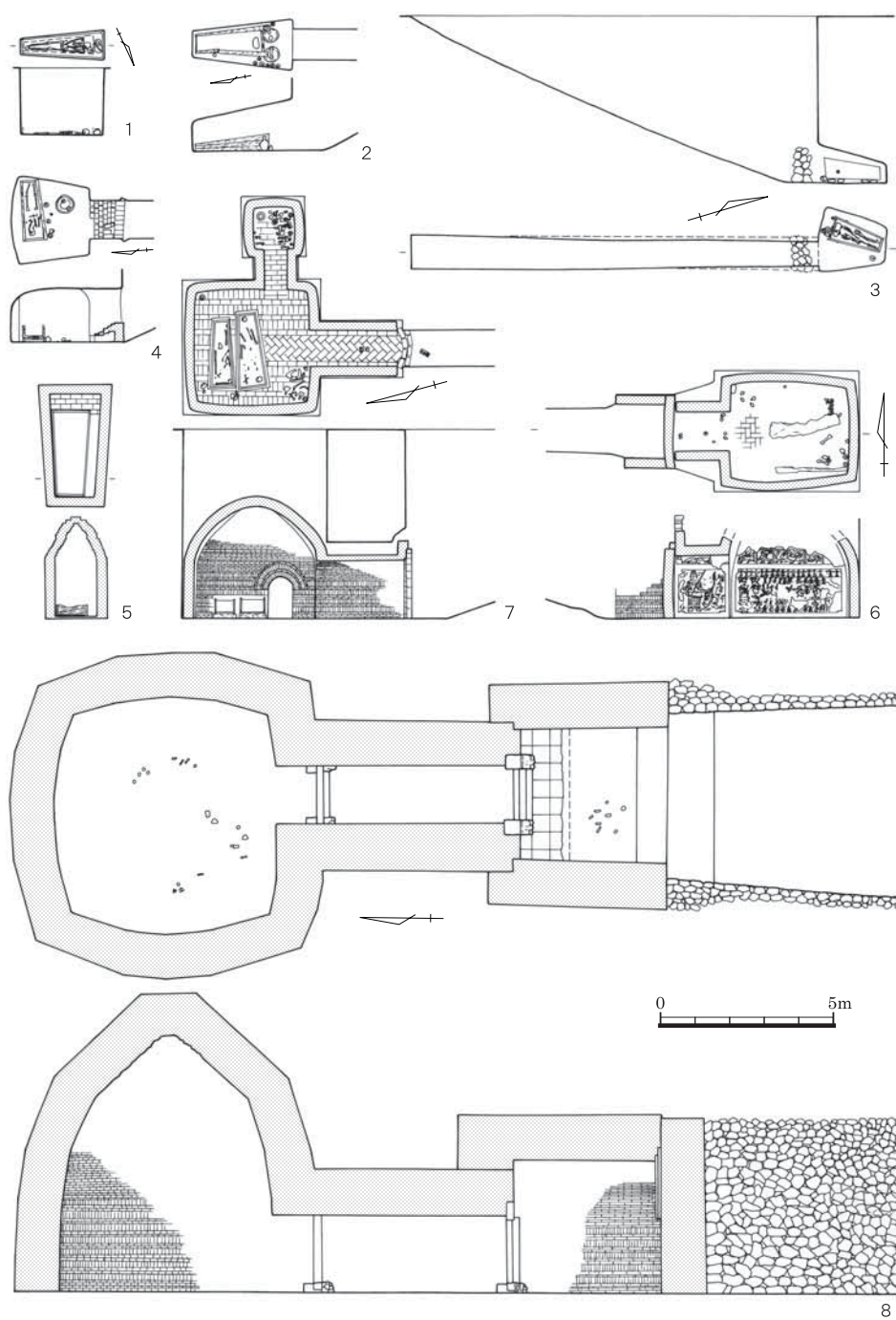


圖4 北魏墓の墓室構造

- | | | | |
|------------|-----------|------------|-----------|
| 1 大同南郊51號墓 | 2 七里村28號墓 | 3 雁北師院7號墓 | 4 七里村36號墓 |
| 5 美岱村北魏墓 | 6 沙嶺壁畫墓 | 7 雁北師院52號墓 | 8 方山永固陵 |

土器は、一九五五年發見の墓と共通し、ほぼ同時期のものと推定される。地表から竪穴を掘りこんで小さな墓室を築き、頂部は磚を持ち送っていびつなアーチをつくっている(圖4-5)。墓室は東西に長く、全長三メートル、幅一・一三―一・四八メートルで西側が廣い。殘高二・六二メートルをはかる。甬道はなく、墓室の四壁および頂部は磚でおおわれている。墓室は棺よりわずかに大きい程度で、木製の棺は長さ二・四メートル、廣端幅一・〇四メートル、狹端幅〇・七六メートルであった。墓室と同様に西側の幅が廣く、墓主は頭部を西向きにして埋葬されたことがわかる。

美岱村の磚室墓はごく簡単な構造ではあるが、指輪などの金製品が副葬され、また附近で一九五五年に發見された磚室墓からは「河内太守」の銅虎符も出土している。虎符が左右そろった状態で墓から出土するという特殊な事例であり、被葬者が現實に河内郡の太守を経験した人物であったのかどうか疑問はこのころ。しかし、北魏初期の段階から、一部の人がびとが磚室墓に埋葬されていたことは間違いない。

沙嶺村壁畫墓 沙嶺村七號墓から出土した土器については、すでに前章でとりあげた。沙嶺村東北の臺地上では、磚室墓二基、土洞墓一〇基の計一二基が調査され、その七號墓に壁畫があった。概報〔大同市考古研究所二〇〇六a〕によると、磚室の壁畫墓である七號墓(圖4-6)は、西向きに開口し、墓道の奥に甬道と胴張りのある方形の墓室がつらなる。墓室は東西がやや長く三・四二メートル、南北は二・八六メートルをはかる。東壁(奥壁)に墓主夫妻の像があり、北壁には車馬出行圖をあらわす。南壁はジグザグに張りめぐらせた陣幕によって畫面を東西に分割し、その東半には主人の居所である瓦葺き建物を中心に人びとが集う宴會の場面をあらわし、西側にはテントに端坐する女性たちや、宴會に供するヒツジを屠殺する場面などを描いた。西壁は、墓室入口の兩脇に、楯と刀をもつ一對の武人像をあらわす。墓室四壁の上段には、複数の畏獸・神獸像がならぶ。甬道は、兩側壁に甲冑を身につけて劍と楯をとる武人像と人面獸身の鎮墓獸を、その頂部には人身蛇尾の伏羲・女媧像と一對の龍をあらわしている。甬道側壁に描かれた武人像と鎮墓獸は、北朝の陶俑に特徴的な

「鎮墓俑」の典型的な組みあわせであり〔楊泓一九八六〕、その初期の形態がこの壁畫にあることは興味深い。

墓室内からは多數の漆畫殘片が出土した。大部分は破片と化しているが、赤や黒の彩色が鮮やかに残っていた。漆畫には牀上に端坐する墓主夫妻が描かれ、男主人は鮮卑風の衣服を着て右手に龍文の塵尾をとり、女主人もやはり同様の衣服を着て右手に團扇状のものを持つ。別の破片には、厨房であただしく食事を準備している場面が描かれている。軒先に魚などの食材を吊した小さな建物のなかには、大きな竈を前に調理する女性がいて、外には大きな鉢に水を差しながら食材をこねる男女がみえる。まさかりで薪を割る男や、つるべで井戸から水をくみあげる人物もいる。劍や矛を手にした歩兵や車を描いた破片があり、出行圖も描かれていた可能性がたかい。その漆棺の端に、三行にわたる墨書題記があった。

…元年歲次豕韋月建中呂廿一日丁未、侍中主客尙書領太子少保平西大將軍……破多羅太夫人／…殯于第宅、迄於仲秋八月、將耐葬□□□□於殯宮、易以□……慈祥之永住／…無期、欲□之德、昊天罔極……□莫□□哀哉……□歲月云墨書については、趙瑞民と劉俊喜〔二〇〇六〕、殷憲〔二〇〇六〕らの考察があり、「歲次豕韋」は十二支の亥年、「中呂」の月は四月にあたる。「元年」で亥年四月の「二十一日丁未」という條件に合致するのは、太武帝の太延元年（四三五）のみである。これにより、墓主は破多羅太夫人といい、太武帝の太延元年（四三五）に没し、主人の墓に附葬されたと考えられた。破多羅氏については姚薇元〔一九五八〕の研究があり、『魏書』官氏志に「破多羅氏後改爲潘氏」といい、また部族の名としては「破多蘭」と記されている。『魏書』高車傳は次のようにいう。

牽屯山鮮卑の別種破多蘭部、世よ部落を傳え主り、木易干に至りて武力壯勇あり、左右を劫掠し、西は金城に及び、東は安定を侵し、數年の間諸種之に患う。天興四年、常山王遵を遣りて之を高平に討たしむ。木易干數千騎を將いて國を棄てて遁走し、盡く其の人を京師に徙す。餘種分れ迸り、其の後赫連屈丐の滅ぼす所と爲る。

破多蘭部は牽屯山に出自し、鮮卑の別種と認識されていた。牽屯山の位置について『魏書』余朱天光傳は、北魏末に天光

が賀拔岳・侯莫陳悅らを率いて万俟醜奴を討伐した際、醜奴配下の万俟道洛は高平での攻防に敗れたのち、衆を率いて西のかた牽屯山によったというから、牽屯山は高平（現在の寧夏回族自治区固原縣）の西にあったことがわかる。『水經注』河水に「高平縣西北二百里牽條山」というのはその異名であろう。

破多蘭部は木易干のとき、現在の甘肅省東部を中心に勢力をのびしたが、北魏道武帝は天興四年（四〇二）に常山王遵を遣わしてこれを討たせたという。『魏書』太祖紀によれば常山王は十二月に兵五萬を發し、翌五年二月の戦いで木易干は赫連勃勃とともに敗走した。^③このとき平城附近に徙された人びとのなかに、沙嶺壁畫墓に葬られた破多羅太夫人が含まれていたかもしれない。もっとも、木易干は自身の娘を赫連勃勃に嫁がせて婚姻關係を結んでおり、のちに赫連勃勃は木易干を殺害してその勢力を吸収したから、破多蘭部の一部は夏の赫連氏と命運をともにした。『魏書』世祖紀によれば、勃勃死後の始光四年（四二七）、北魏は統萬城を陷落させ、赫連昌の「羣弟及其諸母、姊妹、妻妾、宮人萬數」を捕虜にしたとい^④い、破多羅太夫人が北魏に入ったのはこのときであった可能性もある。

墨書に記された「侍中・主客尙書・領太子少保・平西大將軍」は破多羅太夫人の子の官職とされ、『魏書』官氏志が記録する太和中の官制によれば、「太子少保」は「東宮三少」のひとつで第二品上に相當する。趙瑞民と劉俊喜（二〇〇六）は、墓主の家族がこのような厚遇をうけたのは、比較的はやくから北魏政權とかかわっていたからであるとし、常山王の征討時に破多羅氏が北魏に降った可能性を示唆している。

いずれにせよ、太武帝の時期には、胡族の墓にも方形の塼室墓が採用されるようになり、高位の墓には壁畫を描いたものもあった。破多羅氏は西方に出自し、姚興のたてた後秦とかかわりが深いため、その墓制の傳統を繼承した可能性も考えられる。しかし、陝西省咸陽で發見された十六國墓は、土洞墓ばかりで塼室墓はなく、壁畫も描かれていない（咸陽市文物考古研究所二〇〇六）。甘肅省西部の酒泉には、西涼代と報告される丁家閭五號墓（甘肅省文物考古研究所編一九八九）のように

十六國時代の塋室壁畫墓があるものの、破多羅氏とのかかわりが明瞭ではないうえ、壁畫の内容も沙嶺七號墓とは異なっている。したがって、現在のところ沙嶺七號墓の系譜を西方に求めることは難しく、むしろ墓の形態や壁畫の内容が、すでに北魏に通有の様式を備えつつあったことに注意すべきであろう。

(3) 雁北師院北魏墓群の構造

二〇〇〇年に大同東郊の雁北師範學院の擴張工事に際して調査された北魏墓群は、五基の塋室墓と六基の土洞墓からなる〔大同市考古研究所編二〇〇八〕。墓はいずれも南南西に開口し、長いスロープ狀墓道の奥に墓室がとりつく構造である。五基の塋室墓は南北一列に配置され、五二號墓のみが南に離れて存在するが、北から一・二・五號墓が整然とならび、三號墓は二號墓の墓道西側に近接してつくられている(圖5)。六基の土洞墓は、五號墓の墓道東側に近接して七號墓と九號墓があり、その東から東南にのこる四基が分布する。このような整然とした配置は、この墓地が共同墓地ではなく、特定の一族が占有する家族墓地のとしての性格を帯びていたことを推測させる。

これらのうち、太和元年(四七七)の墓塋を出土した五號墓(宋紹祖墓)は、全長三七・五七メートル、甬道長二・八五メートル、墓室は南北四・〇五×東西四・〇四メートルをはかり、墓群のなかで最大級の墓である。「平遠將軍」の墓塋を出土した五二號墓(圖4-7)もこれとほぼ同規模で、全長二四・六六メートル、甬道長二・六メートルとやや短いが、墓室は南北四・二×東西四・一八メートルと大きく、さらに主室の西側に耳室がとりつく唯一の構造である。他の三基はやや規模が小さく、一號墓と二號墓は墓室の一邊が三・五メートル程度、三號墓は墓室の一邊が三・八メートル前後である。一方、土洞墓はいずれも小型の偏室または梯形墓室で、九號墓がふたつの棺をおさめるためにやや大きな墓室をもつものの、のこる五基はすべてひとつの棺とわずかな副葬品をおさめる空間しかもたない(圖4-3)。

墓門形態の變化

この墓群がいかにして形成されたのかをさぐるため、墓の造營順序を検討する。まず、五基の塋室墓を比較すると、これらは近似した構造であるにもかかわらず、甬道の前面をおおう墓門の形態がわずかに異なることが判明する(圖6)。五號墓の墓門を例にとると、内側に塋の平面(最も廣い面)をつないで尖頭形アーチをつくり、その外側に横二段・縦一段・横二段の小口積みをかさね、その上に再び平面を正面に向けてならべ、最上段は長手面をつないでアーチをおおう。二號墓もこれとほぼ同じ構造である。それに對し、五二號墓の墓門は、塋の平面をつないで尖頭形アーチの上を、横三段・縦一段の小口積みでおおったものである。單純な構造だが、五號墓や二號墓のアーチは三角形に加工した塋をつめて頂部の隙間をうめているのに對し、五二號墓はアーチの頂部でうまく塋が組みあうように兩側の塋を加工し、滑らかに仕上げている。さらに三號墓では、平面をつないだアーチを二重にかさね、その上を横一段・縦一段・横一段の小口積みの塋でおおう。アーチ頂部の塋を加工し、滑らかな曲線を描くように工夫されている。

漢魏晉の塋室墓には、墓門を設けるものが珍しくないが、條塋のみで複雑な構造をつくるものは少ない。魏晉代には甘肅省の嘉峪關畫像塋墓〔甘肅省文物隊ほか編一九八五〕や敦煌佛爺廟灣畫像塋墓〔甘肅省文物考古研究所編一九九八〕のように、木造の門樓をかたどった墓門をつくるものがあるが、上部構造は複雑でもアーチの構造は單純な小口積みである。北魏の五世紀後葉の塋室墓は、墓門の化粧積みが次第に複雑化していく途上にある。太和五〇八年(四八二—四八四)に造營された方山永固陵の墓門は、蓮蕾をささげもつ童子をあらわしたアーチ形の石彫をはめこんだもので、これは塋の化粧積みを石彫に置きかえたものであろう。陝西省華陰縣の楊舒墓〔崔漢林ほか一九八五〕からは、木造の門樓を塋でかたどった墓門が発見されており、さらに墓門下半は、雁北師院五二號墓や三號墓と同様に、塋の平面を正面として滑らかなアーチをつくっている。楊舒墓は、墓誌から熙平二年(五一七)に葬られたことが知られ、その複雑な墓門の構造は、五世紀後葉の墓門の化粧積みをさらに發展させたものと考えられる。したがって、五世紀後葉の雁北師院墓群では、墓門構造が次第に裝飾的な

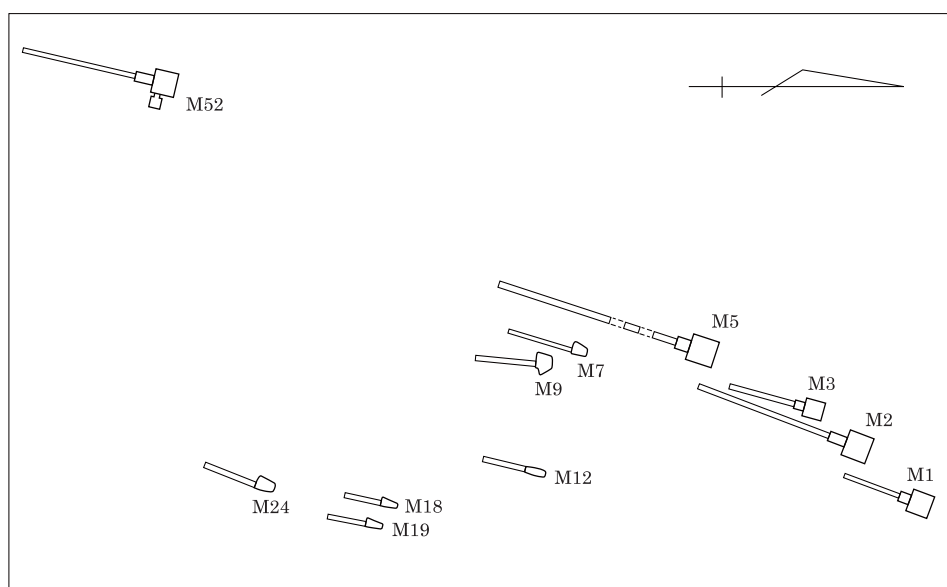


圖5 雁北師院墓群分布圖

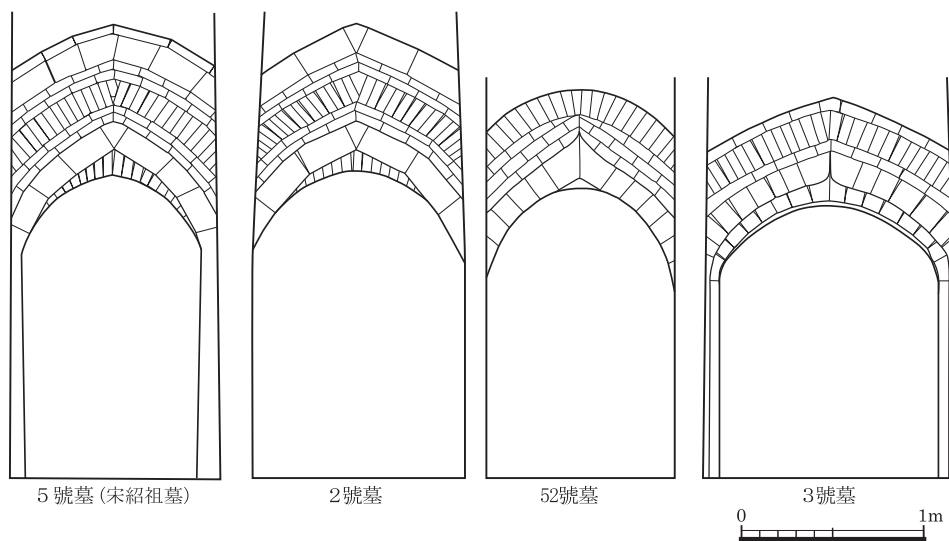


圖6 雁北師院墓群の墓門形態

ものへと變化していった可能性がたかい。一號墓は墓門上半が崩壊して構造が不明瞭だが、のこる四基の埴室墓は、五號墓・二號墓↓五二號墓↓三號墓という變遷が想定できる。次章で検討するように、出土した甕をみると、二號墓と五二號墓の甕は太和八年（四八四）の司馬金龍墓と共通する要素をもっている。また、出土した土器は大同南郊墓群の第四段階に相當するものばかりである。したがって、墓門構造の差異から若干の年代差が想定できるとしても、いずれも太和前半の限られた時期に造營された墓であろう。

墓地の形成過程 五號墓の墓道からは「大代太和元年歲次丁巳幽州刺史燉煌公燉煌郡宋紹祖之柩」の銘を刻んだ埴が出土し、被葬者は太和元年（四七七）に葬られた宋紹祖と判明した。生前には幽州刺史に任ぜられ、敦煌公の爵位を賜與された。宋紹祖の名は史書にみえないが、報告は『魏書』に傳のある宋繇とのかかわりを指摘する。その傳によれば、宋繇は敦煌の人で、後涼と北涼に仕え、沮渠蒙遜・牧犍の父子に重用されたが、太武帝のとき牧犍が北魏に降ると、宋繇もこれにしたがい平城にいたったという^⑤。宋繇の子孫のなかに宋紹祖の名はなく、また官位や爵位が一致する人物もいないため、宋紹祖が宋繇の直系の親族であるとは考えにくいが、宋繇とともに平城に移住した宋氏の一族と推定された。

報告書が收録する人骨の形質學的分析によると、宋紹祖本人のものを含む雁北師院墓群の頭蓋骨は、大同南郊墓郡のそれと同じように、大きくは蒙古人種の北アジア類型に屬し、東アジア類型とも共通する形質をもつという。また、宋紹祖の大腿骨は大きく灣曲し、それは長期にわたる馬上生活によるものと推測された。二號墓からは遊牧民のテントをかたどった甕も出土している。つまり、宋紹祖をはじめ雁北師院墓群の被葬者らは、その容貌や習俗において、北方の遊牧民と大きく變わりなかったと考えられる。敦煌宋氏を稱する宋紹祖墓埴の刻銘が眞實だとしても、五世紀後葉の段階には、彼らの習俗は鮮卑と同化していた可能性がたかい。

出土人骨の年齢と性別をみると、五號墓からは五〇〜六〇歳以上の男性人骨と四五〜五〇歳以上の女性人骨が出土し、

宋紹祖夫妻の遺骨と考えられる。二號墓には四つの棺があり、五〇～六〇歳以上の男性と四五～五〇歳以上の女性のほか、三～四歳と二歳以下の小兒が埋葬されていた。三號墓の墓主は、一六～一八歳の女性という。五二號墓には二つの棺があったが、人骨はのこりがわるく年齢などは不明である。宋紹祖墓とほぼ同規模の墓で、「平遠將軍」の墓埴が出土したことを考えあわせると、一定の官職を経験した人物とその夫人の墓と推定される。

徐萃芳（一九八一）は、河北省河間縣の邢氏墓（孟昭林一九五九）など北魏の家族墓地では、同世代の墓は左右にならび、世代を異にする墓は前後に配列される場合が多いことを指摘する。雁北師院墓群では、宋紹祖墓とほぼ同時期かややおくれて後方に二號墓がつくられ、つづいてその西側に三號墓がつくられた。五號墓と二號墓は、いずれも五〇～六〇歳以上の男性と四五～五〇歳以上の女性が葬られ、夫婦合葬墓であったと考えられる。高齢の人骨は詳細な年齢が判断しにくいいため、二號墓の被葬者が宋紹祖の子という可能性はある。ただ、その場合、二號墓は五號墓とちかい時期に造営されていることから、宋紹祖が没したのはかなり高齢になってからで、死後まもなくその子も亡くなったということになる。しかし、三號墓の被葬者は一六～一八歳の女性で、しかも造営時期は二號墓よりおくれるから、宋紹祖の子を葬ったとすると、かなりの年齢差が生じる。同様に、五號墓の東隣には土洞墓である七號墓が存在し、ひとつの木棺に二人の遺骸がおさめられていた。人骨鑑定によると、この二人は一三～一四歳の少女と六～八歳の小兒であった。副葬された土器は、宋紹祖墓と大きな時期差がなく、高齢の宋紹祖と未成年の二人が同世代であったとは考えにくい。このように、雁北師院墓群は、同世代の墓が左右にならび邢氏墓地などとは異なった配列がなされていた可能性がたかい。

それでは、雁北師院墓群はいかなる原則にもとづいて配列されているのであろうか。北から一號墓・二號墓・五號墓・五二號墓がならんでいて、その造営時期が近接し、被葬者の年齢がちかいものを含んでいることは、これらが同世代の人びとの墓であることを示唆する。おそらく、これら四基の墓には、兄弟のように同世代の關係の深い人びとが順に埋葬さ

れたのであろう。また、二號墓とならんで造營された三號墓は、一六〇一八歳の女性一人が葬られていたことから、二號墓の墓主夫妻の娘で、未婚のまま若くして亡くなった女性と推定される。二號墓には、墓主夫妻以外に未成年二人が埋葬され、これは夭折した子供を合葬したものと考えられる。同様に、五號墓に近接してつくられた七號墓は、宋紹祖夫妻の子供二人を埋葬したもので、幼い子供であるがゆえに、簡素な土洞墓に葬ったのであろう。その東に位置する一二號墓と一九號墓は女性一人だけを埋葬した土洞墓で、宋紹祖の側室を葬った可能性が考えられよう。土洞墓のうち、九號墓は成人の男女を合葬した墓であった。ただ、この墓のみわずかに方位がずれており、時期や性格が異なるのかもしれない。このように、雁北師院墓群では、宋紹祖と世代を同じくする人びとの墓が南北にならび、その側室や幼い子供がその横に近接して葬られたと推測されるのである。

宿白〔一九七八〕によれば、洛陽遷都後の邙山陵墓群では、子の墓は父の墓の前後にずれて位置し、同世代の兄弟の墓は左から右へと順にならぶという。鄭城西北の東魏陵墓群でも、祖穴は前方に、子の墓は後方にあり、兄弟の墓は左から右に配列された〔馬忠理一九九四〕。同時期の家族墓地の構造がよくわかっていないため、雁北師院墓群のみの検討から確言することはできないが、平城の時代には、世代の差異によって墓を前後左右に配列するという原理が、まだ浸透していなかった可能性はあるだろう。

(4) 塋室墓の構造的變化

美岱村で一九六一年に発見された塋室墓のように、北魏初期の塋室墓は、規模も小さく、簡単な構造であった。太武帝の時期になると、沙嶺壁畫墓のように胴張りをもつ方形塋室墓が登場する。墓室の幅にくらべ奥行きがやや長いことをのぞけば、五世紀後葉以降に流行する方形塋室墓と共通する構造である。しかし、このような完成した形態の塋室墓は、五

世紀中葉以前にはごく少數しかなかった。五世紀中葉以前の北魏墓は、ほとんどが豎穴土壙墓や土洞墓で占められ、方形塋室墓は特定の階層や出自の人びとのみが造營したと考えられる。

一方、五世紀中葉には、簡素で小規模な塋室墓もあったようである。遼寧省西部の朝陽で發見された劉賢墓は、南東に開口する梯形の墓室内に木棺を安置し、その前面に螭首龜趺を備えた碑形の墓誌をたてていた〔曹汎一九八四〕。墓について詳細な報告はなく、公表された實測圖から算出すると、墓室は長さ二・五メートル、幅一・一五～一・五メートルほどで、その大きさは美岱村一九六一年發見の塋室墓に近似する。墓誌によれば、被葬者は劉賢といい、生前には營州臨泉戍主に任命されている。劉賢は朔方の人で、劉虎・劉衛臣・赫連勃勃の家系につらなる人物の可能性があるという。その埋葬年代は「太武皇帝」の文字があることから太武帝の没した承平元年（四五二）以降で、おおよそ文成帝の在位した四五二～四六五年頃と推定された。地域が異なるため單純には比較できないが、五世紀も後半になると、戍主のような下級武官でも小規模な塋室墓を造營するようになったのであろう。

方形の塋室墓が急速に増加するのは、太和年間のことである。太和元年（四七七）の宋紹祖墓にみるように、胴張りをもつ正方形の塋室墓が定着していく段階である。このような塋築の方形單室墓は、洛陽遷都後の邙山陵墓群でさかんに造營されただけでなく、北朝後期から唐代初期の墓の構造にもそのまま繼承された。ただ、邙山陵墓群のほとんどが方形單室墓で占められているのに對し、平城附近の北魏墓は、方形單室墓のほか、前室と後室の二室構造をとるものや、耳室をとるものがある。遷都以前の平城で墓室形態が統一されることはなく、その點において平城における墓制の變化は不完全であったともいえる。しかし、次章にみるように、太和年間の平城において方形塋室墓が急速に普及したことは、墓に對する觀念をも左右する大きな變化であった。

三 太和年間における墓制の變革

『宋書』索虜傳⁽⁷⁾は、道武帝のころの拓跋鮮卑の葬俗について次のように記している。

死すれば則ち潛埋し、墳壟の處かるる所なし、葬送に至れば、皆な棺柩を虚設し、冢槨を立て、生時の車馬器用は皆なこれを焼き以て亡者を送る。

墓に墳丘を築かず、山谷に人知れず葬ることは、後趙の石勒や南燕の慕容徳ら五胡十六國の君主とも共通する胡族の風習であった〔楊寬一九八一〕。この記述が、嚴密に道武帝の時代のことをいったものとは斷定できないものの、拓跋鮮卑の葬俗は、當初、遊牧民に通有の方式にしたがっていたことがうかがえる。

このような胡風にしたがった葬俗は、五世紀をつうじて次第にうすれていき、胡族も次第に中國の傳統的な墓制をとりいれていく。前章でみたように、五世紀初めにはすでに一部の階層において塋室墓が採用され、太武帝の時代には平城近郊で壁畫をもつ塋室墓がつくられるようになる。しかし五世紀中葉以前には、沙嶺壁畫墓のような本格的な塋室墓はごく少數であり、それが普及するのは孝文帝の太和年間になってからである。

(1) 墓道方向の變化

五世紀後葉には、塋室墓の普及という變化が起こるだけでなく、墓の開口方向にも大きな變化があらわれる。大同南郊墓群の場合、墓の開口方向は西向きが一〇二基（六一・一％）と最も多く、南向きが四八基（二八・七％）でそれに次ぐ。東向きは一三基（七・八％）、北向きは二基（一・二％）のみである。豎穴土壙墓のように墓道の開口方向が明らかでないものは、被葬者の頭位を墓の開口方向とした。墓道をもつ墓では、原則として被葬者の頭位が墓道の方と一致するからであ

る。時期不明の二一基をのぞく一四六基の開口方向を時期別にみると、次のようである（圖3）。

第一段階 西三基（一〇〇％）

第二段階 西二四基（七二・七％）、南五基（二五・二％）、東二基（六・〇％）、北二基（六・〇％）

第三段階 西三一基（五一・七％）、南二一基（三五・〇％）、東八基（一三・三％）

第四段階 西二六基（六三・四％）、南一四基（三四・一％）、東一基（二・四％）

第五段階 西六基（六六・七％）、南三基（三三・三％）

このように大同南郊墓群では、全時期をつうじて西向きの墓が半数以上を占めている。第三段階以降、南向きの墓が増加するとはいえ、全體の三分の一を占めるにとどまっている。墓の開口方向は、家族などのまとまりによって統一されていた可能性がたかいが、大同南郊墓群は複数の家族墓地が密集して形成されているらしく、その情況は不明瞭である。

平城の周邊で発見された北魏墓においても、同様の狀況が確認できる。一九六一年に美岱村で発見された北魏初期の墓は西向きの小型塼室墓であった。太延元年（四三五）の沙嶺七號墓は、西側に墓道がとりつく塼築の壁畫墓である。大同市の東南およそ一六キロに所在する大同湖東一號墓は、胴張りのある方形の前室と後室を甬道で連結した構造で、墓道は西向きに開口する〔大同市考古研究所二〇〇四〕。蓮華化生の銅製棺飾から太和年間の造營と推定される。また、大同南郊の智家堡村附近で発見された北魏墓は、梯形墓室の土洞墓で、墓道を西向きに開口する〔劉俊喜ほか二〇〇四〕。木棺の漆畫にみる環狀パルメット唐草文は雲岡石窟第九洞の彫刻と近似し、やはり四八〇年代の墓であろう。このように、平城の全時期をつうじて、墓道を西向きに開口する墓が存在し、大同南郊墓群が孤例ではないことがわかる。

これに對し、五世紀後葉の大型塼室墓には、墓道を南向きに開口する例が目立つ。先にみた太和元年（四七七）の宋紹祖墓を含む雁北師院北魏墓群〔大同市考古研究所編二〇〇八〕は、すべて墓道をほぼ南向きに開口している。また、太和八年（四

八四)の墓誌を出土した司馬金龍墓(山西省大同市博物館ほか一九七二や、太和四(八四)に造營された文明太皇太后馮氏の方山永固陵(圖4-8)も、墓道を南向きに開口する大型の塋室墓である(大同市博物館ほか一九七八)。大同南郊の七里村墓群は、墓塋や副葬品から五世紀半ば以降に形成された墓地と考えられ、土洞墓二六基と塋室墓八基のうち、土洞墓一基のみが東西向きだが、のこりはすべて南向きの墓であった(大同市考古研究所二〇〇六b)。

これらの事例から、五世紀後葉の平城では、西向きの墓も依然としてつくられていたが、塋室墓を中心に新たに形成された墓群では南向きの墓が増加していたことがうかがえる。とりわけ、墓誌や題記によって被葬者が明らかな大型塋室墓は、ほとんどが南向きである。つまり、大同南郊墓群において五世紀後葉にいたっても西向きの墓が三分の二を占めるのは、小型墓を中心に形成された墓地であるからだろう。西向きから南向きへの変化は、上位階層の墓からはじまった変化だったのである。洛陽遷都後にはこの傾向はいっそう進み、墓室の開口方向はほぼ南向きに限られる。

甘肅省敦煌佛爺廟灣の西晉墓(甘肅省文物考古研究所編一九九八)はすべて西向きの墓で、祁家灣(甘肅省文物考古研究所編一九九四)の西晉・十六國墓では東向きと西向きの墓が大多數を占める。陝西省咸陽の十六國墓(咸陽市文物考古研究所二〇〇六)では、墓道の開口方向に東・西・南があり、墓地の単位ごとにその方位が統一されている。墓の方位は家族ごとに決められていたのであろう。東西向きの墓はとりわけ長安以西に顯著であるが、漢魏晉において墓の向きをそろえた墓地を形成することは各地でおこなわれており、北魏の墓制はその影響のもとに成立したと考えられる。

他方で、後漢や西晉の陵墓群には、墓道を南に開口するものが多い。漢魏洛陽城の東では、墓側建築をとまなう後漢墓が発掘され、墳丘の下から南向きの塋室墓が検出された(中國社會科學院考古研究所一九九三)。偃師市白草坡では、後漢の皇帝陵と推定される大墓が陵園の建築址とあわせて調査され、直徑一二五メートルの墳丘下に、南向きの墓道をもつ墓室が存在することが確認されている(洛陽市第二文物工作隊ほか二〇〇七a)。その東北二・五キロで発見された閭樓村の後漢墓群

は、南に墓道をひらく七基の墓を方形の環濠で區劃した家族墓地であった〔洛陽市第二文物工作隊ほか二〇〇七b〕。また、洛陽の邙山では西晉の皇帝陵を含む墓群が調査され、確認された枕頭山墓地の二三基と峻陽陵墓地の五基は、すべて長い墓道を南にひらく土洞墓であった〔中國社會科學院考古研究所一九八四〕。北魏の太和年間にいたって南向きの墓が急増するのは、先行する中原の後漢や西晉の陵墓群を意識した結果とも考えられよう。

ただ、中原の漢魏晉墓をみると、南向きの墓が優勢であったのは皇帝陵を含む陵墓群に限られ、洛陽近郊であっても墓の方位は墓地ごとに異なっていた。それに對し、太和以降の北魏墓では、地域や階層をこえて南向きの墓に統一されていく傾向がみてとれる。もともと北魏前期には、平城の民族構成の複雑さに由來して、西向きをはじめとする多様な方位の墓が混在していた。そのような多様性を解消し、統一した墓制を浸透させた點こそが、太和年間の墓制變革の大きな特徴であった〔同井二〇〇九〕。北魏の陵墓制度が最終的に完成をみるのは、洛陽遷都後のことであったが、その變化は遷都直前の平城においてはじまっていたのである。

（2）副葬品と葬具の變化

副葬品と犠牲の變化 大同南郊墓群の副葬品は、全時期をつうじて土器が多く、それに漆器や青銅器、ガラス製品などが加わる。また、一六七基のうち七五基、四四・六％の墓からウシ・ヒツジ・ウマ・イヌなどの動物骨が出土した。そのうち四一基は、棺の附近から動物骨が出土し、方形や圓形の漆案の上に犠牲を置いたものと、棺前に直接さされたものがある。棺内から動物骨が出土した例も一五基ある。一七基は、墓室壁面に壁龕を設け、そこに犠牲を置いていた。また、墓道を埋めもどす際に犠牲をささげたと考えられる例が五基ある。このような鮮卑の習俗に由來する動物犠牲は、時期の下降とともに減少するものの、洛陽遷都後にも若干の例がある。

先にみた『宋書』索虜傳は、拓跋鮮卑が、生前に使用した車馬や武具を葬送時に焼く習俗があったことを傳えている。⁽⁸⁾ やや時代がさかのぼるが、『魏志』烏丸傳の裴注が引く『魏書』により、烏丸にも同様に死者の乗馬や衣服を焼く風習があったことが知られる。⁽⁹⁾ 烏丸は、死者の靈魂が、遼東の西北數千里にある赤山に歸すると信じていたという。おそらく鮮卑や烏丸には、もともと墓のなかに靈魂がとどまるという思想はなく、死者の靈魂は聖なる山へ歸すると考えられたのであろう。墓を豪華につくり、多數の副葬品をおさめることは、本來あまり重視されなかった。

大同南郊墓群から出土した土器や漆器などは飲食物をいれるための容器類であり、動物犠牲とともに葬送のまつりにささげる供物として墓におさめられたのであろう。金銀の装身具やガラス容器などは、やや性格が異なり、被葬者自身が生前に入手したもの、あるいは副葬用として製作されたものと考えられる。このように、北魏初期の副葬品は、死者にささげる供物を主體とし、それに少量の珍品が加えられた。

しかし、五世紀後葉にいたって方形墓室が普及し、墓室内にひろい空間が確保されるようになると、副葬品や葬具にも變化が生じる。陶俑を多量に副葬する墓が目立ち、また大型の石牀や石槨などを墓室内に設けるものがあらわれる。土器の副葬が繼續する一方で、容器類に加えて竈、臼、井戸などをかたどった明器類が登場する。これにより、墓室は單に棺をおさめるだけの空間から、墓主の靈魂がとどまる空間へと變化したのである。

陶俑の副葬 平城時代にさかのぼる北魏の陶俑は、ほとんどが五世紀後葉のものである。太延元年(四三五)の沙嶺七號墓の壁畫には出行圖が描かれるのみで、俑を副葬した形跡はない。他の地域では、寧夏彭陽縣の新集一號墓から一二六體の俑が出土し、俑の特徴や組みあわせから、北魏前期のものと推定されている(寧夏固原博物館一九八八、蘇哲二〇〇二)。また、呼和浩特市大學路の北魏墓でも俑が出土し、報告者は俑や土器の特徴をもとに平城定都前後のものと考えた(郭素新一九七七)。しかし、俑の造形は稚拙だが、その様式と組みあわせは五世紀後葉の俑と共通し、平城定都の時期までさかのぼるも



圖7 北魏太和年間の陶俑

1～4 宋紹祖墓 5 司馬金龍墓 6 雁北師院2號墓 7 雁北師院52號墓

のではないだろう。五世紀中葉以前の北魏墓では、俑を副葬するものがあつたとしてもごく少数であつた。

埋葬年代の明確な北魏墓のなかで、俑を副葬した最初の例は、太和元年（四七七）の宋紹祖墓である（大同市考古研究所編二〇〇八）。墓室中央に据えられた家形の石槨と墓室壁面との間に、多数の俑が隊列をなして置かれていた。盗掘をうけているとはいえ、俑の配置は埋葬當時から大きく改變されていないようである。大型の鎮墓武人俑二體と鎮墓獸一體は、墓室入口の兩側で發見された。そのほかの人物俑は一一三體があつた。騎馬俑は石槨の左右から出土し、鶏冠形の帽子をかぶり樂器を手にする輕騎兵（圖7-2）が、甲冑を装着した重裝騎兵（圖7-1）を先導するかたちで整列していた。その後方に、甲冑を身につけた歩卒俑（圖7-3）や、風帽とマントをまとう儀杖兵（圖7-4）などの立俑が、石槨の周圍をとりまくようにならぶ。これらは蘇哲（二〇〇三）がいうように、出行の隊列をあらわした鹵簿俑であろう。一方、胡服を身にまとう女侍俑五體は、石槨の内部から出土し、鹵簿俑とは區別される。これらは墓主の傍らにあつて、身のまわりの世話をする役割を期待されたのだろう。

平城時代の墓で、現在までに最も多くの俑を出土したのは、太和八年（四八四）の司馬金龍墓である（山西省大同市博物館ほか一九七二、蘇哲二〇〇二）。盗掘のために配置は大きく亂れ、すでに失われた俑もあると考えられるが、三六七體の陶俑と一體の木俑が出土した。宋紹祖墓にくらべて數量が壓倒的に多いだけでなく、ほとんどが綠色や褐色の施釉俑である點が目をはひく。輕騎兵と重裝騎兵を含む騎兵俑、甲冑歩卒俑、儀杖俑、胡人俑など出行の隊列をなす俑は三三一體あり、そのほとんどは前室から出土した。女侍俑も前室南側から出土した。また、耳室と前室の奥から發見された正坐する女樂俑（圖7-5）は、宋紹祖墓にはないものである。本來これらは耳室に置かれていたのかもしれない。鎮墓武人俑二體と鎮墓獸一體は前室奥にあり、後室へといたる甬道の入口を守護していた。

司馬金龍墓の女樂俑と近似する例は、雁北師院墓群の二號墓と五二號墓にある。二號墓と五二號墓の俑は宋紹祖墓とよ

く似た特徴をもつが、女侍俑のほかに女舞俑や正坐した女樂俑がある點が異なる。これらを比較すると、宋紹祖墓の女侍俑は帽子の縫製痕を單純な篋描き沈線であらわし、二號墓の女樂俑や女侍俑の帽子も同様である。それに對し、二號墓の女舞俑一點と、五二號墓の女舞俑・女樂俑・女侍俑の帽子には、麥穗狀の縫製痕が表現されている（圖7・6・7）。このような麥穗狀の縫製痕は、司馬金龍墓の女樂俑と共通する。大同南郊の七里村二二號墓と三五號墓からは、やはり帽子に麥穗狀の縫製痕を表現した稚拙な造形の伎樂俑が出土している（大同市考古研究所二〇〇六b）。三五號墓は、墓埧の出土によって司馬金龍と同じく太和八年（四八四）に葬られた楊衆慶の墓であることが判明している。^⑩このような麥穗狀の縫製痕をあらわす帽子の出現は、俑の種類が増加することとあわせて、宋紹祖墓より後出する特徴なのかもしれない。ほかに大同附近では、迎賓大道七六號墓（大同市考古研究所二〇〇六c）に司馬金龍墓と類似した施釉俑があり、下深井一號墓（大同市考古研究所二〇〇四）からも陶俑が出土し、いずれも太和年間のものと考えられる。したがって、平城附近において陶俑の副葬がさかんになるのは、宋紹祖墓がつくられた太和初年頃からということになるう。

宋紹祖墓や司馬金龍墓は過去に盜掘をうけているため、數量の比較は難しい。しかし、これらの俑が出行の隊列をあらわした鹵簿俑であるとすれば、その種類や數量に被葬者の身分が反映された可能性がたかい。司馬金龍墓から三六七體の陶俑が出土したのに對し、宋紹祖墓の俑が一一五體であったことは偶然ではなく、兩者の身分差に由來するのであろう。一方、大同南郊墓群においては、全時期をつうじて俑を副葬した墓は皆無であり、それはこの墓群が小型墓ばかりであることと無關係ではないだろう。

石牀の出現 北朝から隋代の墓に特徴的な寢臺形の葬具に石牀があり、平城の時期はその出現期にあたる。大同南郊墓群では、方形墓室の土洞墓である一二號墓から石牀が出土した（圖8・1）。墓室の奥に土臺をつくり、上面に四枚の板石を敷きならべ、前面に三本の脚がついた石彫板をたてかけた簡単な構造である。前面の彫刻は波浪紋帶の上にパルメット唐

草紋帶をかさね、中央の脚に稚拙な鋪首形の獸面をかざり、左右の脚には水瓶をあらわした。副葬された土器は第三段階の特徴をそなえており、宋紹祖墓よりふるい。一方で、報告は大同南郊墓群で出土した石牀・石燈・石柱礎などの砂岩彫刻が、總じて雲岡石窟の開鑿がはじまる和平元年（四六〇）をさかのぼるものではないと推定している。この見解が正しいとすれば、一二二號墓の石牀は四六〇年から四七七年の間に製作されたことになる。石牀脚部の獸面紋は稚拙だが、波浪紋や唐草紋は宋紹祖墓のそれと大きく變わらず、太和初年を大きくさかのぼることはないだろう。

年代の明確な北魏墓のなかで最もふるい例は、太和元年（四七七）の宋紹祖墓である。墓室中央を占める家形の石槨内部に、板石をならべて逆凹字形に石牀を備えつけていた（圖8・2・3）。その彫刻は、波浪紋帶とパルメット唐草紋帶を列點紋で區切り、中央の脚部には鋪首形の獸面があり、兩側面の脚部にはパルメットと尾の長い獸がそれぞれあらわされた。石槨の内側には、琴と琵琶を演奏する人物や舞踏の場面などが描かれていた。

太和八年（四八四）の司馬金龍墓では、後室の北西に、東を正面として石牀が置かれていた。石牀正面の彫刻は、波浪紋帶の上に、伎樂天や鳥獸と組みあわせたパルメット唐草紋帶をかざる。三本の脚のうち、中央の脚部は獸面を一對の力士がささえ、兩側の脚部にもそれぞれ力士があらわされる。波浪紋・唐草紋・獸面紋は平彫りで、力士は半肉彫りで表現される。墓室の中央から發見された彩色の漆畫屏風には、列女・忠臣・孝子・名賢の故事が描かれていた（圖8・8）。これらはもともと石牀と組みあわせて用いられたのであろう。

大同南郊の智家堡村でも石牀前面の石彫板が發見されている。波浪紋帶の上にパルメット唐草紋帶をかさね、中央には大型の獸面と二頭の獅子をあらわし、左右の脚部には力士が彫刻された。脚部の間は一段彫りくぼめただけの略式のものである。報告した王銀田と曹臣民（二〇〇四）は、力士の着衣が雲岡石窟第七洞後室のものにちかく、第九洞前室のものは異なることを指摘し、太和前期に位置づけた。

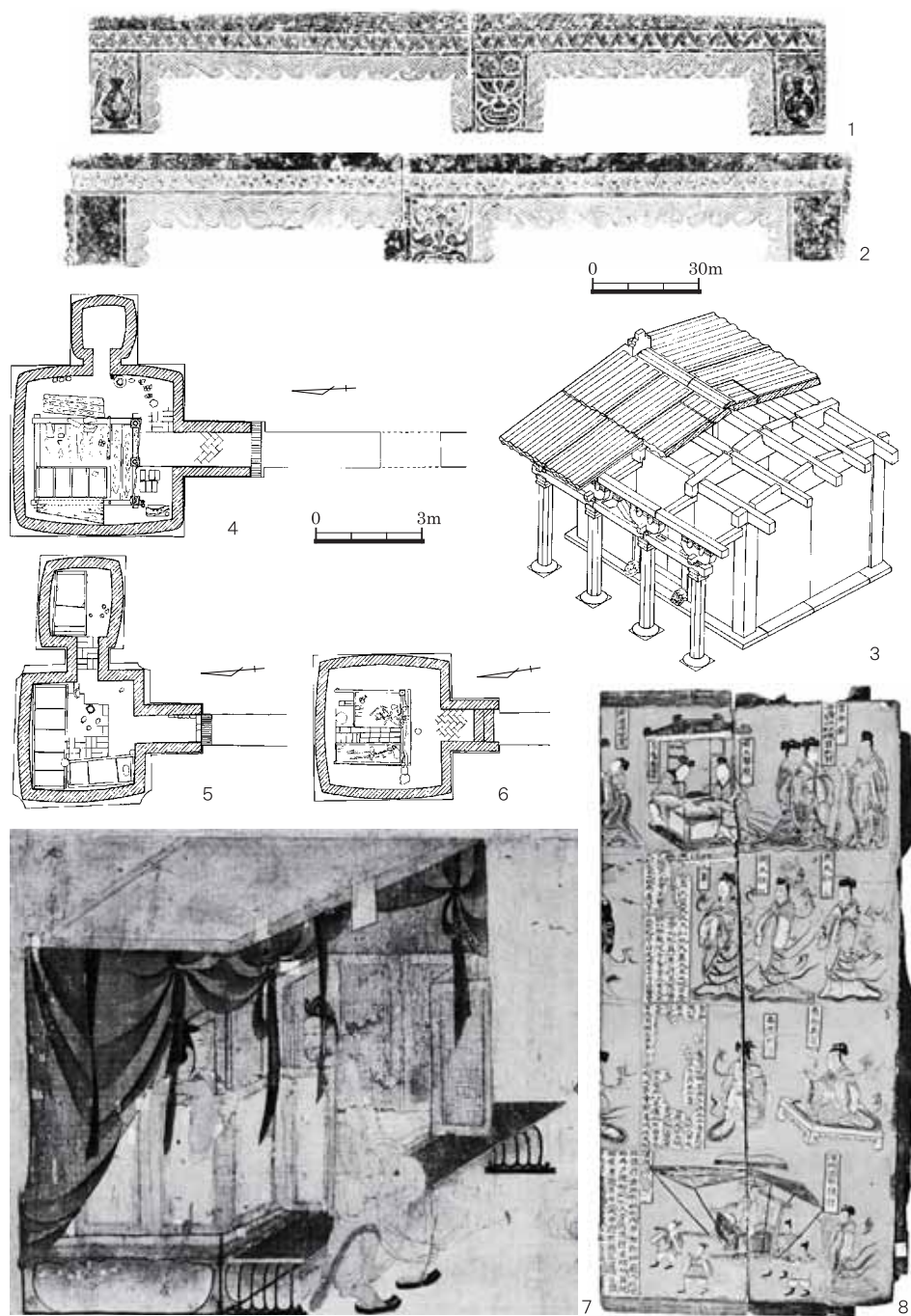


圖8 石牀と関連資料

- 1 大同南郊 112 號墓 2・3 宋紹祖墓 4 七里村 1 號墓 5 七里村 14 號墓
6 七里村 37 號墓 7 『女史箴圖』部分 8 司馬金龍墓

また、大同南郊の七里村一四號墓（圖8-5）では、後室の北側と西側、耳室の北側から計三組の石牀が出土している（大同市考古研究所二〇〇六b）。詳細な報告はないが、やはり石牀の正面には波浪紋とパルメット唐草紋をかざり、中央の脚には獸面があらわされた。智家堡村の例と同様に、脚部の間は完全に刳りぬかず、一段彫りくぼめただけである。

以上の五例のうち、大同南郊一二號墓のみが太和年間よりふるく位置づけられ、それ以外はすべて太和前半の特徴をもつ。したがって、現在のところ石牀が出現するのは太和初年かそれを少しさかのぼる頃ということになるだろう。山本忠尙（二〇〇八）は、畫像石や壁畫などの圖像から、牀や榻は後漢代に坐具として用いられ、それが三燕で流行し、北魏になって石製の葬具として採用されたと考えた。三燕をへて北魏に伝えられたのかは判断が難しいが、北魏の石牀が漢魏晉の坐具や寢具の傳統をうけたものであることは間違いない。

山本は、屋根をもつ石槨が本來の格式を備えた葬具で、圍屏のみのものは略式であるという。しかし、宋紹祖より高位の司馬金龍の墓には石槨がなく、洛陽遷都後の資料でも石槨の有無は被葬者の階層とは對應していないため、石槨が本來の格式とは考えにくい。司馬金龍墓の石牀上からは、木製の欄干が出土し、榻や牀帳の部材であったと推測されている（山西省大同市博物館ほか一九七二）。墓の壁畫にしばしみる牀は、その上に帳をかけるものがほとんどであり、本來、司馬金龍墓の石牀も帳と組みあわせて用いられていたのである。司馬金龍墓では、本來の位置からは大きく動かされていたが、流麗な彫刻をもつ小型の礎石が出土しており、これが帳を支持する礎石であった可能性がたかい。また、七里村一號墓と三七號墓（圖8-4・6）では、石牀こそ出土しなかったが、礎石上に木製の帳が組み立てられていた痕跡があり、そのなかに木棺が安置されていた（大同市考古研究所二〇〇六b）。帳そのものは有機質であるため遺存しにくい、北魏において墓室内に帳がしばしば設けられたことは、出土した礎石によって知ることができる。

『南史』毛惠素傳によれば、南朝齊の少府卿であった毛惠素は「性至孝、母服除後、更修母所住處牀帳屏帷、每月朔十五

向帷悲泣、傍人爲之感傷、終身如此」と、母の死後、その喪があけてからも、母が起居した「牀帳屏帷」を整え、帷に向かつて泣き暮らしたという。「牀帳屏帷」とは牀を屏風で囲み、その上に帳を架した豪華な寢臺である。東晉の顧愷之の作と伝えられる『女史箴圖』に描かれた、屏風と組みあわせた牀帳（圖8-7）がそれで、司馬金龍墓に設けられた牀帳もそれに類したものでろう。毛惠素の母の牀帳は、墓のなかにおさめられたものではないが、生前の母を象徴するものと考えられたのである。曾布川寛（二〇〇六）によれば、北朝の圍屏に描かれた内容は、生前の世界となんら變わりなく、それによって現實世界と死後の世界との斷絶を否定し、靈魂の連續性や永遠性を表現したという。墓室内におさめられた牀帳は、まさに生前の墓主の生活を象徴するものであり、墓室内でその靈魂が永遠に暮らすことを願ったのであろう。

おわりに

平城時代の墓制についての知見は、この數年で大幅に増加し、墓や土器を通時的に把握することができるようになった。しかし、具體像が次第に明らかになってきたとはいえ、その研究は端緒にいたばかりである。本稿では、まず基礎作業として、近年報告された大同南郊墓群の土器編年を再検討した。その結果、一部の土器の年代に問題がのこるとはいえ、報告書が提示した變遷の概要と年代の基準は、おおむね妥當であると判斷した。土器の製作技術は、鮮卑の漢化と對應し、五世紀をつうじて段階的に向上していくが、形態や裝飾の上では太和年間にあたって大きな變化がみとめられた。

墓制の變遷も同様で、北魏では、その初期の段階から美岱村北魏墓のように簡単な埴室墓が用いられ、太武帝の時期には沙嶺壁畫墓にみる本格的な埴室の方形單室墓が登場し、それが太和年間に急速に普及する。しかし、小型墓の多い大同南郊墓群においては、五世紀末まで豎穴土壙墓や土洞墓が多數を占め、埴室墓はわずか一基だけである。宋紹祖一族の墓

地である雁北師院墓群では、塋室墓と土洞墓が同時期に共存し、側室や幼い子供のような人びとが土洞墓に葬られたと考えた。墓の構造は、時期によって變化するだけでなく、被葬者の地位や財力によって異なっていたのである。

太和年間に塋室墓が急速に普及することと對應して、北魏の墓制にはさまざまな變化が生じる。北魏の初期に多かった西向きの墓が次第に減少し、南向きの墓に統一される。棺をおさめるだけの空間しかもたなかった豎穴土壙墓や梯形墓室の土洞墓にかわって方形墓室が普及し、墓室内の空間は擴大した。北魏の初期には、死者にささげる飲食物と動物犠牲に、わずかな装身具やガラス器などが加わる程度であったが、五世紀後葉には俑や明器の副葬がはじまり、葬具としての石牀が出現して、墓室は死者の靈魂がとどまる空間へと變化する。このような墓制の變化は、墓に對する觀念そのものが、この時期に大きく變容したことをものがたっている。

しかし、陵墓制度の成立という觀點からみれば、それが完成するのは洛陽遷都後のことであった。五世紀後葉の平城にみられた多様な形態の墓室は、洛陽の邙山陵墓群において統一され、墳丘や墓室の規模に秩序が反映されるようになる。また、平城において不明瞭であった墓域に對する規制が明確化し、邙山陵墓群では孝文帝の長陵を頂點に皇族や貴族の墓域がさだめられた。墓誌の形状や記載形式が規格化するのも、洛陽遷都後のことである。このような洛陽遷都後の陵墓制度については、本稿で言及することのできなかった墓誌などの變化とあわせて、稿をあらためて考察することにしたい。

註

(1)

『魏書』卷一百三 高車傳「牽屯山鮮卑別種破多蘭部、世傳主部落、至木易干有武力壯勇、劫掠左右、西及金城、東侵安定、數年間諸種患之。天興四年、遣常山王遵討之於高平。木易干將數千騎棄國遁走、盡徙其人於京師。餘種分迸、其後爲赫連屈丐所滅。」

(2)

『魏書』卷七五 余朱天光傳「建義元年夏、万俟醜奴僭大號、朝廷憂之。乃除天光使持節都督雍岐二州諸軍事驃騎大將軍雍州刺史、率大都督武衛將軍賀拔岳、大都督侯莫陳悅等以討醜奴。……天光遣岳輕騎急追、明日、及醜奴於平涼長平坑、一戰擒之。天光明便共逼高平、城内執送蕭寶夤而降。賊行臺万俟道洛率衆六千人入山不下。……天光遣慰喻、

- 道洛不從、乃率衆西依牽屯山、據險自守。」
- (3) 『魏書』卷一 太祖紀「(天興四年)冬十二月辛亥、詔征西大將軍常山王遵等率衆五萬討破多蘭部帥木易子。……(五年)二月癸丑、征西大將軍常山王遵等至安定之高平、木易于率數千騎與衛辰・屈丐棄國遁走、追至隴西瓦亭、不及而還。獲其輜重庫藏、馬四萬餘匹、駱駝・犍牛三千餘頭、牛羊九萬餘口。班賜將士各有差。徙其民於京師。」
- (4) 『魏書』卷九五 鐵弗劉虎傳「屈子、本名勃勃……太悉伏送之姚興。興高平公破多羅沒弈于妻之以女。……太祖末、屈子襲殺沒弈于而并其衆、僭稱大夏天王、號年龍昇、置百官。」
- (5) 『魏書』卷五一 宋繇傳「宋繇、字體業、敦煌人也。……呂光時、舉秀才、除郎中。後奔段業、業拜繇中散常侍。繇以業無經濟遠略、西奔李暹、歷位通顯。……沮渠蒙遜平酒泉……拜尙書吏部郎中、委以銓衡之任。蒙遜之將死也、以子牧犍委託之。牧犍以繇爲左丞、送其妹興平公主於京師。世祖拜繇爲河西王右丞相、賜爵清水公、加安遠將軍。世祖并涼州、從牧犍至京師。」
- (6) 劉賢墓誌は、碑額に「劉戌主之墓誌」と記し、碑身の四面に「君諱賢、字洛侯、朔方人也。……魏太武帝開定中原、併有秦隴、移秦大姓、散入燕齊、君先至營土、因遂家焉。……君梟雄果毅、忠勇兼施、翼陽白公辟爲中正。後爲臨泉戍主、東面都督。天不弔善、殲此名哲。春秋六十有四、奄致薨殂。」などの銘文が刻まれていた。
- (7) 『宋書』卷九五 索虜傳「死則潛埋、無墳壟處所、至於葬送、皆虛設棺槨、立冢棚、生時車馬器用皆燒之以送亡者。」
- (8) 前掲註7『宋書』索虜傳參照。
- (9) 『魏書』(『三國志』魏書卷三十 烏丸鮮卑東夷傳 裴注所引)「烏丸者、東胡也。……貴兵死、斂屍有棺、始死則哭、葬則歌舞相送。肥養犬、以采繩嬰牽、并取亡者所乘馬、衣物、生時服飾、皆燒以送之。特屬累犬、使護死者神靈歸乎赤山。赤山在遼東西北數千里、如中國人以死之魂神歸泰山也。」
- (10) 七里村三五號墓出土の墓埴は四點あり、そのうち一點には「大代太和八年歲在甲子十一月庚午朔仇池／投下客楊衆慶代建威將軍靈開子建興太守／春秋六十七卒追贈冠軍將軍秦州刺史清／水靖使葬于平城南十里略陽清水楊君之銘」の四行が刻まれていた。他の一點は同内容だが銘を刻む途中で廢棄したらしく、のこる二點は破片である。張志忠(二〇〇六)は楊衆慶が仇池すなわち現在の甘肅省東南部に出自する氏族であると推定している。

參考文獻

- 章正 二〇〇九 「鮮卑墓葬研究」『考古學報』第三期
- 殷憲 二〇〇六 「山西大同沙嶺北魏壁畫墓漆畫題記研究」張慶捷・李書吉・李綱編『四・六世紀的北中國與歐亞大陸』科學出版社
- 烏蘭察布博物館 一九九四 「察右後旗三道灣墓地」『內蒙古文物考古文集』第一輯 中國大百科全書出版社
- 王銀田 二〇〇八 「試論大同南郊北魏墓的族屬」『北朝研究』第六輯
- 王銀田・曹臣民 二〇〇四 「北魏石彫三品」『文物』第六期
- 王大方 一九九三 「烏審旗發現大夏國墓群及紀年墓誌」『中國文物報』二月一四日第一版
- 岡村秀典編 二〇〇六 『雲岡石窟』遺物篇 朋友書店
- 郭素新 一九七七 「內蒙古呼和浩特北魏墓」『文物』第五期
- 甘肅省文物考古研究所編 一九八九 『酒泉十六國墓壁畫』文物出版社
- 甘肅省文物考古研究所編 一九九四 『敦煌祁家灣——西晉十六國墓葬發掘報告』文物出版社
- 甘肅省文物考古研究所編 一九九八 『敦煌佛爺廟灣西晉畫像磚墓』文物出版社
- 甘肅省文物隊・甘肅省博物館・嘉峪關市文物管理所編 一九八五 『嘉峪關壁畫墓發掘報告』文物出版社
- 咸陽市文物考古研究所 二〇〇六 『咸陽十六國墓』文物出版社

- 魏堅主編 二〇〇四『內蒙古地區鮮卑墓葬的發現與研究』科學出版社
- 崔漢林・夏振英 一九八五「陝西華陰楊舒墓發掘簡報」『文博』第二期
- 山西省考古研究所・大同市考古研究所 二〇〇一「大同市北魏宋紹祖墓發掘簡報」『文物』第七期
- 山西省大同市博物館・山西省文物工作委員會 一九七二「山西大同石家寨北魏司馬金龍墓」『文物』第三期
- 山西大學歷史文化學院・山西省考古研究所・大同市博物館 二〇〇六「大同南郊北魏墓群」科學出版社
- 宿白 一九七七 a 「東北、內蒙古地區的鮮卑遺迹——鮮卑遺迹輯錄之一」『文物』第五期
- 宿白 一九七七 b 「盛樂、平城、帶的拓跋鮮卑——北魏遺迹——鮮卑遺迹輯錄之二」『文物』第十一期
- 宿白 一九七八「北魏洛陽城和北邙陵墓——鮮卑遺迹輯錄之三」『文物』第七期
- 出土文物展覽工作組編 一九七二『文化大革命期間出土文物』第一輯 文物出版社
- 徐萃芳 一九八一「中國秦漢魏晉南北朝時代的陵園和埌域」『考古』第六期
- 靜宜 一九五六「對『內蒙古土默特旗出土的漢代銅器』一文商榷」『考古通訊』第四期
- 曹汎 一九八四「北魏劉賢墓誌」『考古』第七期
- 蘇哲 二〇〇二「五胡十六國・北朝時代的出行圖和鹵簿俑」後藤直・茂木雅博編『東アジアと日本の考古學』第Ⅱ卷 同成社
- 蘇哲 二〇〇三「大同宋紹祖墓出土的俑について」『亞洲考古學』第一號
- 亞洲考古學研究會
- 曾布川寬 二〇〇六「中國出土のソグド石刻畫像試論」『中國美術の圖像學』京都大學人文科學研究所
- 曾布川寬・岡田健編 二〇〇〇『世界美術大全集』東洋編第三卷 小學館
- 孫危 二〇〇七『鮮卑考古學文化研究』科學出版社
- 大同市考古研究所 二〇〇四「山西大同下深井北魏墓發掘簡報」『文物』第六期
- 大同市考古研究所 二〇〇六 a 「山西大同沙嶺北魏壁畫墓發掘簡報」『文物』第一期
- 大同市考古研究所 二〇〇六 b 「山西大同七里村北魏墓群發掘簡報」『文物』第一期
- 大同市考古研究所 二〇〇六 c 「山西大同迎賓大道北魏墓群」『文物』第一期
- 大同市考古研究所編 二〇〇八『大同雁北師院北魏墓群』文物出版社
- 大同市博物館 一九八九「大同東郊北魏元淑墓」『文物』第八期
- 大同市博物館・山西省文物工作委員會 一九七八「大同方山北魏永固陵」『文物』第七期
- 中國科學院考古研究所內蒙古工作隊 一九六四「內蒙古巴林左旗南楊家營子的遺址和墓葬」『考古』第一期
- 中國社會科學院考古研究所洛陽漢魏故城工作隊 一九八四「西晉帝陵勘察記」『考古』第二期
- 中國社會科學院考古研究所洛陽漢魏城隊 一九九三「漢魏洛陽城西東漢墓園遺址」『考古學報』第三期
- 張志忠 二〇〇六「大同七里村北魏楊衆慶墓磚銘析」『文物』第一〇期
- 趙瑞民・劉俊喜 二〇〇六「大同沙嶺北魏壁畫墓出土漆皮文字考」『文物』第一期
- 陳大爲 一九六〇「遼寧北票房身村晉墓發掘簡報」『考古』第一期
- 內蒙古文物工作隊 一九六二「內蒙古呼和浩特美岱村北魏墓」『考古』第二期
- 寧夏固原博物館 一九八八「彭陽新集北魏墓」『文物』第九期
- 馬衡 一九五六「北魏虎符跋」『考古通訊』第四期
- 馬忠理 一九九四「磁縣北朝墓群——東魏北齊陵墓兆域考」『文物』第一期

- 馬長壽 一九六二『烏桓與鮮卑』上海人民出版社
- 三崎良章 二〇〇二『大夏紀年墓誌銘』に見える『大夏二年』の意味』『早稲田大學本庄高等學院研究紀要』第一〇號
- 向井佑介 二〇〇九「北魏の考古資料と鮮卑の漢化」『東洋史研究』第六八卷第三號
- 孟昭林 一九五九「記後魏邢偉墓出土物及邢蠻墓的發現」『考古』第四期
- 山本忠尚 二〇〇八「圍屏石牀の研究」『日中美術考古學研究』吉川弘文館（初出は二〇〇六『中國考古學』第六號）
- 楊泓 一九八六「北朝陶俑的源流、演變及其影響」『中國考古學研究——夏鼐先生考古五十年紀念論文集』文物出版社
- 楊寬（尾形勇・太田有子譯）一九八一『中國皇帝陵の起源と變遷』學生社
- 姚薇元 一九五八『北朝胡姓考』科學出版社
- 洛陽市第二文物工作隊・偃師市文物管理委員會 二〇〇七a「偃師白草坡東漢帝陵園遺址」『文物』第一〇期
- 洛陽市第二文物工作隊・偃師市文物管理委員會 二〇〇七b「偃師閣樓東漢陪葬墓園」『文物』第一〇期
- 羅振玉 一九二五『增訂歷代符牌圖錄』東方學會
- 李逸友 一九五六「內蒙古土默特旗出土的漢代銅器」『考古通訊』第二期
- 李逸友 一九五七「關於內蒙古土默特旗出土文物情況的補正——兼答靜宜同志」『考古通訊』第一期
- 陸思賢 一九八一「巴圖灣水庫區的古墓」『內蒙古文物考古』創刊號
- 劉俊喜・高峰 二〇〇四「大同智家堡北魏墓棺板畫」『文物』第二二期

挿圖出典

- 圖1 山西大學歷史文化學院ほか二〇〇六をもとに作製
- 圖2 113 大同市考古研究所二〇〇六a・圖四より再トレース
- 圖2 143 大同市考古研究所編二〇〇八・圖二・四二・一四九より再トレース
- 圖2 18・9 大同市博物館一九八九・圖八より再トレース
- 圖3 山西大學歷史文化學院ほか二〇〇六・圖二をもとに作製
- 圖4 1 山西大學歷史文化學院ほか二〇〇六・圖六Aを一部改變
- 圖4 2・4 大同市考古研究所二〇〇六b・圖二・五を一部改變
- 圖4 3・7 大同市考古研究所編二〇〇八・圖三・二〇・二二を一部改變
- 圖4 5 內蒙古文物工作隊一九六二・圖一を一部改變
- 圖4 6 大同市考古研究所二〇〇六a・圖三を一部改變
- 圖4 8 大同市博物館ほか一九七八・圖三を一部改變
- 圖5 大同市考古研究所編二〇〇八・圖二より再トレース
- 圖6 大同市考古研究所編二〇〇八・圖一八・二〇・三〇・五一をもとに作製
- 圖7 113 4・6・7 大同市考古研究所編二〇〇八・彩版二二・二〇・七
- 七・八〇・八四
- 圖7 5 出土文物展覽工作組編一九七二・一三九頁
- 圖8 1 山西大學歷史文化學院ほか二〇〇六・圖一四七B
- 圖8 2・3 大同市考古研究所編二〇〇八・圖五四・七九
- 圖8 4 6 大同市考古研究所二〇〇六b・圖七・九を一部改變
- 圖8 7 曾布川・岡田編二〇〇〇・七九
- 圖8 8 出土文物展覽工作組編一九七二・一四三頁